

ふたりの女性はその張り紙に気付いていなかったが是非もなく賛成した。三人は賢の部屋に向かった。部屋には既に食事の支度が調っていた。テーブルを挟んで賢に向かって祐子と亜希子が並んで座った。賢はふたりの違ったタイプの美人を前にしている自分を客観的に見ようと試みた。ふたりの女性は美しかった。祐子はいつもの光を放ってはいなかったが一際輝いていた。亜希子はその清楚さが際立っていた。ふたりの女性は互いに牽制し合っていた。賢はアルコールを控えようと思った。しかし祐子がやや積極性を見せた。

「ねえ、ワインでもいただこうか？でも、賢くんの傷によくないか」

「今日は一寸、止めとこうよ」

賢は亜希子を気遣って言ったのだが、祐子が落胆したかもしれないと思いを切り替えた。

「ところで祐子、よく休みが取れたな。なんて言って休んだんだ」

「「親友が旅先で怪我をしちゃって、私以外に助けてあげられる人はいないんです」って説明したの」

「親友って俺のことか？全く本当のことになっちゃったな」

「恋人って言った方がよかったかしら」

祐子は作り笑いをした。

「わたくしも、手を引いて頂いたときは賢さんの恋人みたいな気がしました」

亜希子は空かさず牽制した。祐子もそれに応じて言い返した。

「そうね、賢くんの手は力強くて、強く握られるとくらくらっとしちゃうわ」

賢にもふたりの女性が相手を牽制し合っている様子が見て取れた。話をエスカレートさせてはいけないと感じた。自分は不純な意識を持っていたつもりはなかった。しかし、自分の行動の結果として、目の前のふたりの女性が顔は笑ってはいいても戦う姿勢で会話しているのはあまり心地よいものではなかった。

「明日、初めに行くつもりの足立美術館はアメリカの日本庭園の専門誌で桂離宮を抜いて1位にランクされたことがあるんだって。まあアメリ

カ人は直ぐにランクを付けたがるし、多分見た目の美しさで選んでいるんだと思うけどね。西洋人には桂離宮の侘びの世界は理解し難いんだろうな。日本人ならどっちがいいなんて真剣に議論しないと思う。日本って国は何でも吸い込んで吸収消化してしまうだろう。だから富士山のように美と醜を含んだ自然を簡単に受け入れるけど、ユネスコには理解できないから簡単には世界自然遺産として承認できなかったんだ。総ては両極を含んでいるってことを認めたくないんだな」

「日本の華道の作法も頭で考えると理解できないと思います。無心で、静と動を合わせ、鉄の剣山の上に柔らかい華の美を表現する。両極を内包して初めて真の美を味わえるのだと思います」

「そうね、確かに古事記では伊弉冉尊が黄泉の国で醜をさらし、日に500人を殺すと言えば、伊弉諾尊が現世で日に1000の産屋を立てると言うでしょう。日本にはこういうところがあるんだと思うわ」

賢はやっとふたりの女性が同じ方向を向いてきたと感じた。三人は何とか穏やかな雰囲気ですべての食事を終えた。室内の電話でフロントに食事が終わったことを連絡すると、三人は旅館内で催されるどじょうすくい演劇を見る為に1階の宴会場に移動した。100人分ほどの座布団が敷かれていた。もう、20人ほどが最前列の席を占めていた。三人は入り口にほど近い隅の席に、賢を真ん中に右に亜希子、左に祐子が陣取った。亜希子が賢の右手をそっと取って包帯を見た。血の滲みはなかった。

「賢さん、傷は大丈夫ですか？」

「ありがとう。おかげで、もうほとんど痛みを感じなくなったよ。この後で湯に入ってみるよ」

祐子はその会話を聞いていたが、

「賢くん、お風呂の後で包帯巻き直してあげる。私、お風呂から上がったなら賢くんの部屋に行くわ」

と言った。亜希子はドキッとした。

「でも・・・」

と言いかけたが、祐子が間髪を入れずに

「亜希子さんにばかり面倒を懸けちゃったから、今度は私がするわね」

と言い切った。賢はふたりの間に再び無言の対抗意識が流れはじめたのを感じた。

「祐子、もう大丈夫だよ。俺、自分でできるから」

「だめよ、きちんと巻いてないと寝ている間にずれて出血したら困るでしょう」

祐子は譲らなかった。賢はこれ以上言っても祐子は引かないと察し、

「じゃ、頼むよ」

と言った。亜希子の気持ちは穏やかでなかった。

「賢さん、わたくしもお風呂の後で、お部屋にお伺いしてもよろしいですか？」

と言った。祐子はむっとした。賢は、

「うん。今日のまとめをしなくちゃな。海の老人のこともまだきちんと整理できてないし、江川さんとの繋がりに付いても明日と明後日の方針を立てたいしね」

ふたりはやっと収まった。座布団の席は満席となり、後方の席の客は少しずつ前に詰めるような動きをしていた。

やがて公演が始まった。演技者は保存会の人たちだった。主演は50代と思われる男性で、補助役も同年代の二名の女性だった。杖を持って泥鰻を追いながら腰を上下して前進してゆく格好はとても剽軽で、全員拍手喝采だった。賢も笑った。祐子も賢に合わせて少し声を抑えながら笑った。亜希子は右手で口を隠して、くすくすっと笑った。三人は解放感を満喫した。大勢の人たちと同期して笑うことで快感を引き起こした。その後見物人も参加して演技の指導が行われた。これもまた観衆の笑いを巻き起こした。公演が終わったのは8時過ぎだった。三人は直ぐに風呂に入ることにした。風呂に入った後、祐子と亜希子は賢の部屋に向かうことになっていた。賢は風呂の支度をすると包帯を外した。亜希子のしてくれた包帯のおかげで出血は無く、傷当てのガーゼも抵抗無く外すことができた。賢は亜希子が置いていった絆創膏を切って、傷口が塞がるように貼った。傷口を絆創膏で覆って入浴して湯治の効果があるかどうか疑問に思ったが、化膿させてはならなかった。浴場は四人ほ

どが既に湯船に浸かっており、二人が洗い場で身体を流していた。湯船はそれほど大きくなかった。賢はできるだけ右手を湯に浸けないように注意しながら入浴した。身体が熱くなってくると傷口に疼きを感じられた。賢は傷口に湯が掛からないように注意して身体を洗い、早めに湯から上がった。部屋に戻ると既に床が延べられていた。賢は布団を丸めて壁に押し当てると、テーブルを布団の手前に引き出した。そしてスーツケースからノートを取り出し、今日一日の状況と精神的な変化をノートに記入し始めた。

祐子と亜希子と一緒に入浴することになった。初めに祐子が浴室に入ったが、亜希子も1分もしない内に姿を現した。祐子が洗い場で身体を流していると亜希子がタオルで前を隠して入って来て隣に座った。ふたりは互いに相手の体型を観察しようとした。亜希子は祐子より細身で、裸になっても肩から腰に掛けての線が滑らかで清楚な感じを持っている。祐子は亜希子のしなやかな身のこなしはこの体型から来ているんじゃないかと考えた。身体全体に品の良さが現れていた。祐子は自分の肉体については常に意識している。「私の方がスタイルはいいわ」と考えた。亜希子は「まさか祐子さんと一緒にお風呂に入ることになるなんて」と思っていた。亜希子は洗い場の椅子に意識を集中して座り、

「祐子さん、よく旅行されるのですか？」

と聞いた。

「ええ、よく出掛けるわ。でもここは初めてなの。亜希子さんは？」

「わたくしは、両親がよくあちこち連れ行ってくれました。ここにも高校生の頃1度来たことがあります。でもその時は天気が悪くて・・・」ふたりは身体を流すと一緒に湯船に浸かった。女湯は男湯に比べ小さ目だった。

「亜希子さん、あなたこの間、確か賢くんに命を助けてもらったって言ってたわね」

「ええ、わたくしはあの方に救われて魂が震えましたが、あの方にとってはあの事件はたいしたことではなかったのかも知れません。でも、わたくしはあの事件の後で自分の一生を決めました。わたくし、この三日間

であの方の心底からの優しさを経験させていただきました。あの方は誰に対しても優しいのです」

「そうね、賢くんは老弱男女の区別無く、すべての人に優しいわ。だからみんな賢くんには惹かれるのよ。私も、賢くんがいないと自分が自分でなくなったような空しい気がするの」

亜希子は黙ってしまった。祐子が会社を休んでまでここに駆け付けたのを目の当たりにし、祐子が賢に対して特別の感情を持っていることがはっきり分かった。しかし、決心は決して揺るがないと更に強く自分に言い聞かせていた。亜希子にとっての賢はもっと粗野な男性でもよかった。しかし、亜希子を救いながら亜希子を襲った男のことも考えて行動した賢は人の本来の姿を現しているように見えた。その時、この人と共に生きようと心に決めたのであった。当時はまだ高校生になったばかりで、あれ以来多くの男性に出逢ってきた。自分を大切にしてくれた男性も多かった。しかし、あれほど自分の魂を震わせたのは賢だけだった。亜希子は祐子には負けないと心で誓った。ふたりは風呂から上がると浴場に持参した浴衣に着替えた。亜希子は一旦自分の部屋に戻り直ぐに賢の部屋に向かった。賢はノートに記録を書き込んでいる最中だった。賢に促されて部屋の中に入ると亜希子は言った。

「賢さん、今日の汚れた衣類を出してください。わたくし、洗わせていただきます」

賢は初め遠慮したが、亜希子が引き下がらないので仕方なく、トラベルバッグの中をまさぐってシャツと下着を引っ張り出し亜希子に手渡した。亜希子は洗面所で手際よく洗い始めた。そこに祐子がやって来た。祐子は救急箱を手にしてしていた。既に亜希子が洗濯をしているのを横目で見えた。

「亜希子さん、早かったわね」

祐子はそう言うと、部屋に入り賢の右隣に座った。

「賢くん、包帯を変えるわね」

祐子は賢の右手を取った。既に包帯は無く、傷口に絆創膏が貼ってある。祐子はそれを静かに剥がした。傷口は回りの組織から盛り上がり紫色を

している。祐子は先ほど亜希子がしたようにガーゼで傷口をそっと拭いて汚れを落とし、オキシフルで消毒をして外傷用軟膏を傷口に塗った。その後からガーゼを二重にして傷に当て、紙テープで留めてから包帯の片端にテープを貼って腕に固定して巻き始めた。祐子は亜希子よりもきれいに巻こう思い、ゆっくり巻いていった。巻き終わると包帯をはさみで切り離し、端を紙テープで固定した。

「祐子、ありがとう。とてもいい感じだ。ふたりにこんなに親切にされて本当にありがたいと思うよ」

「よかった、うまくできたみたいね。それじゃ、私、救急箱を返して来るわ」

祐子が部屋を出て行くと、直ぐに亜希子が部屋に入って来た。

「賢さん、下着はタオル掛けに掛けました。シャツは衣紋掛けに掛けた方がよいと思います。一つ貸していただけますか」

賢がクローゼットから衣紋掛けを取り出して亜希子に渡した。亜希子はそれを持って洗面所に戻り、それをシャワーのフックに掛けた。

「亜希子さん、ありがとう。いつも洗濯させてしまって」

「いいえ、こういうことはわたくしにもできますわ。いつでも仰ってくださいね」

亜希子は襟を揃え浴衣の裾を合わせ直すと、テーブルを挟んで賢の反対側に正座した。

「亜希子さん、あのVEAS館の意図していること分かる？」

「あそこを訪れた人に、その存在の疑似体験をしてもらうことで、その存在に対する認識力を高めて、すべての存在に対する慈しみの心を養うことだと思いますが」

「表向きはそういうことになっているけど、本当の目的はその先までの人間の意識改革なんだ。すべての人間の意識を覚醒のレベルまで高めようとしているんだよ」

「どこかの秘密組織が行っているのでしょうか？」

「あれは精神改革社団法人という組織が運営しているようだけど、それが、噂によると、お金の出所がよく分からないようなんだ。なんでも三

兆円規模の資金を保有しているようなんだがね。世界各地にVEAS館が出来てきているらしい。でも、それが主要都市ばかりではないんだな。聞いたこともないような場所に建設されたりするんだ。運営も大変だと思うけどね」

祐子が戻って来た。祐子は部屋に賢と亜希子がふたりきりでいることに焦燥感を覚えていて、小走りでフロントに行ったのだが、係の者がおらずに右往左往した。漸く年寄りのカウンター番の男性がやって来たので、救急箱の返却の手続きをして急いで賢の部屋に戻った。祐子がこんなに焦燥感を覚えるのは、亜希子の賢への思いが想像以上に強いと知ったからだ。祐子は戻りながら、「どうしてこんなことになったのだろう」と思った。賢の部屋に着くと、軽くノックをしてから直ぐにドアを開け、浴衣の前を確認してから部屋の中に入った。

「祐子、ごめん。俺の為に寛ぐ暇もなくて」

「いいのよ、賢くんのためなもの」

「今、亜希子さんとVEAS館の話をしていたんだけど、祐子はVEASについて何か知っているか？」

祐子は賢の右隣に足を左に崩して座りながら言った。

「今度、新宿のVEAS館に連れて行ってくれるんでしょ。私、VEASについて少し調べたの。あれはエジプトの一人の女性がインドの社団法人に出資して創設させたそうよ。その女性は、「お金はテクニックでどうにでもなる」って言っているそうよ。それより、彼女は「今地球を変えないと、間に合わない」って言っているらしいわ」

「おまえ、よくそんなことまで知っているな」

「会社のファイヤーウォールを通り抜けた、私宛てのスパムメールに書かれていたのよ。差出人はアフリカに住む宇宙人となっていたけど、なんか胡散臭いからガセネタかも知れないわね」

「祐子は商社勤務だけあって、いろいろな情報を持っているな」

「すごいわ。わたくしも見習わなくちゃ」

「ところで、今日は江川さんの失踪の手懸かりを見付けることはできなかったけど、明日に期待しよう」

その時電話が鳴った。賢が受話器を取った。警察からだった。先ほど賢を傷つけた男を捕らえたとのことだった。

「はい、内観です。お手数をお掛けして申し訳ありませんでした。その方の責任ではありません。わたくしが不注意だったのです・・・いいえ、告訴など致しません。公園の管理員の方も実際ご覧になっていません。わたくしが彼を押さえ付けているところを見たので、多分誤解されたのでしょう。・・・話の成り行きで、あの方が興奮してナイフを出したりしましたので誤解されましたが、自分の不注意で少し怪我をしました。でももう、大丈夫ですし、・・・はい・・・ですから釈放して頂きたいのです・・・はい、わたくしが以前にあの方の息子さんと自動車事故を起こしたときに、息子さんが大怪我をされて、あの方はその時のわたくしの対応に腹を立てられたので、あそこで偶然に会いまして、・・・いいえ、異常な性格ではないと思います・・・はい。よろしく願い致します」

「賢さん、あの方をお許しになられたのですか？」

「いや、許すも、許さないもない。原因の発端は俺にあるし、未だにあの方の息子さんは半身不随で車椅子の生活になってしまっているんだ。あの人まで苦しみの中に置いてしまった」

「賢くん、でも、はっきり理由を説明して誤解を解いた方がよかったんじゃない？」

「いや、あの人達にとっては、あれが現実なんだ。理由なんて必要ない」
祐子は賢の対応に歯痒さを感じた。亜希子はそこに優しさを見ていた。

「明日は大山に入ってみよう。あの現場に着くまでにドライブインなんか幾つかあるだろう。そこでいろいろ聞いてみよう。まず、朝七時に下のレストランで一緒に食事をしよう」

「分かったわ。賢くん、手は大丈夫？」

「ありがとう」

「賢さん、もしできたら、明日の朝もう一度お湯に浸かってみるといいと思います。ここの温泉は傷に効くとのことですから」

「そうよ、賢くん、そうするといいわ」

「ありがとう、そうするよ。じゃ、明日の朝食堂で会おう」
ふたりは部屋を出た。賢はドアを閉めて、再びスーツケースからノート
を取り出した。もう一冊のノートが指に触れた。それを広げてみた。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た、
街の冷たい水のしたたりが、
わたくしの魂を凍らせてゆく
空は青、草は緑に、血の色は赤、
水は透き通って、
それでも、わたくしの中を巡る
彷徨える心は、
わたしから離れ
あなたを求め
こなた、かなたを追いかける
いまあなたに巡り逢い
心は戻り
わたくしの内なる太陽は
麗しき歪子を産み落とす
あなたは幣を手に
静かな鏡面に祈る
水面にひと滴の涙が落ち
波は無限に広がり
辺り一面
花が咲き乱れ、
ふたたび時はながれはじめる

ああ

三ページ目を開けてみた。そこには13の言葉とその言葉の右側にペア
の言葉のような単語が書かれていて、最初にめざめ、最後に巡り巡ると
記されていた。

めざめ

無限の黎明	闇の音
七人の娘達	夢の現
群青の世界	水の色
宇宙の誤謬	円の点
極微の探索	輪の形
一人の飛翔	心の果
空間の認識	実と空
内外の崩壊	有の滅
自他の和合	生の智
経綸の顕現	虚の現
振動の偏在	無の理
全体の融合	喜の海
存在の彼岸	愛の淵

巡り巡る

賢はどこの部分とは特定できないが、ここに海の老人の話した内容がちりばめられているのではないかという感じを覚えた。その時ドアをノックする微かな音がした。賢は確かに自分の部屋のドアをノックする音だと思った。祐子だった。賢がドアを開くと祐子がさっと中に入った。賢は祐子が焦燥感にかられて行動していることを分かっていた。祐子が部屋に入ると賢はドアに鍵を掛けた。

翌朝、賢は六時に入浴すべく地階に下りた。途中、浴室から出てくる亜希子に出会った。

「おはよう」

亜希子はちらっと賢を見たが、

「おはようございます」

と言って眼を伏せた。

「腕の傷は如何ですか？」

俯きながら尋ねた声に昨日の活気は感じられない。賢は亜希子が気付いていると思った。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

亜希子は昨夜、確かに祐子が賢の部屋のドアをロックしているのを聞いた。そして、およそ一時間後に祐子が出て行くまで、眠れずに布団の中で悶々としていた。いろいろな情景が頭の中を駆け巡った。しかし、どうすることもできなかった。亜希子は朝まで半覚半睡の状態だった。目を覚ますためもあって入浴に降りて来たのであった。亜希子は湯船の中で、一生賢に附いて行くことができるか否か自問してみて、「絶対大丈夫」と自分に言って聞かせることを反芻したが、やはり迷いは残った。朝食で三人が顔を合わせた。亜希子は賢と祐子の表情を見つめた。祐子は生き生きしていた。賢はいつもと変わらなかった。それが亜希子にとっては救いだった。食事を済ますと三人はチェックアウトをした。祐子も亜希子も半袖のブラウスに綿のパンツ、スニーカーという出で立ちだった。賢と亜希子は麦わら帽を被った。祐子は帽子を持っていなかった。賢は自分の麦わら帽を祐子に被せてやった。祐子はうれしそうだった。トランクに三人の荷物を積み込むと、賢は左側の前・後座席のドアを開け、祐子を前の座席に亜希子を後部座席に乗せてドアを締めてやった。ふたりは特に座る位置のことでぶつかり合うことはなかった。亜希子は少し寂しく思った。昨日までは自分だけをエスコートしていた賢が祐子にも同じように、いや、むしろ自分に対するよりもっと優しく接しているように思えることにジレンマを感じた。賢は車を走らせて一度9号線に入り、そこから山陰道、米子自動車道を抜け米子インターを経て大山観光道路に入った。そこからは次第に大山の姿が大きく迫ってくる。途中幾つかのドライブインに寄って江川の確認したが無駄だった。溝口インターから大山環状道路に入った。山道だった。暫く走って榊水高原のドライブインで休憩を取った。三人は車を降り、それぞれ分かれて江川のことを訪ね歩いた。祐子も自分用に江川の写真を用意していた。しかし、ここのドライブインの店員は他と同様、誰も江川のことを認識していなかった。賢は赤谷が「このドライブインで休憩した」と言っていたのを思い出した。バスが転落したのは鍵掛峠で大山の美しい姿を眼に焼き付けた後だった。祐子がハンドバッグの中から一冊の小冊子を取

り出した。それは大山の昔話という題名の民話集だった。

「私がこの辺りの民話を一つ読んであげるわ。この辺りは昔から国造りの地として、神話や民話が沢山あるのよ。じゃ、読むわね。……」

「むかしむかし、米子地方に大きな四角い石が天から降って来ました。まだこの地がやっと神々様によって創られた頃のこと、一晩でこんなに大きな石が現れたので、みんな恐れをなしました。しかし、この石は大変不思議な石で、悪者が通ると必ず身体に異常が顕れ、病気に罹って死んでしまいました。皆、心の中に何かしらの悪い思いを持っていましたから、この石を恐れ誰もこの石には近付けなかったのです。この米子地方に一人の親孝行で大変心のきれいな娘が住んでいましたが、海・山が荒れたとき不治の病に罹ってしまいました。この女性は自分の身を嘆き、命を神様にお返ししようと海辺に出る途中、この石のある場所を通り掛かりました。しかし、どういうわけか急に身体が動けなくなり、この石の上で一晩を過ごしました。するとどうでしょう、朝にはすっかり病が消えてしまい元気な身体に戻ってしまいました。娘は神様に感謝を捧げると、近所の人たちにこのことを話して歩きました。その話は有名になり、それからは心のきれいな人が病気になった時、その石に触ってお祈りすると忽ち病が直り元気になりました。この地方には大国主命という神様がおられました。大国主命は、兄神たちに虐められ、妨害されながらも美女八上姫（やかみひめ）の心を射止め、姫を得ました。八上姫は大国主の正妻須世理姫（すせりひめ）の嫉妬にいたたまれず、娘阿陀萱奴志喜岐姫（かだかやぬしきぎひめ）を連れて因幡に帰ることになりました。帰路、橋本を通られた時、娘の姫が榎の枝に手の指を挟まれて抜けなくなりました。娘はそれを神様が「ここに留まるように」となされたこととと思いました。そこで娘の姫は「わたくしはこの地に住みますから、お母様は因幡に帰ってください」と言われました。この時既に娘は身籠っていました。やがて娘は産気付いてこの石の上でお産をしました。お産は何の苦しみもなく済みました。産まれて来た阿陀萱姫は大変元気な子供でした。この時お産をしたところが今の阿陀萱神社で、それ以来お産をする前にこの石にお祈りを捧げると、お産が楽になりま

した。人々はこの石を産石と呼ぶようになりました。とさ」 おしまい」

「祐子、何処で民話集を買ったんだ？」

「さっきのホテルよ」

「そうか、俺も出雲大社の前の土産物店で二冊買ったよ。後で見えてみるといいよ」

「うん。後で、見せて」

「祐子さん、民話が好きなのね」

「ええ、その土地の民話は、そこに住む人々の心にあるものを物語っているとと思うのよ。喜びや、恐れや、祈りなんかをね」

「なるほど、そうなんですわね。わたくしも今度、民話を読んでみたいと思います」

「ところで、江川さんの情報、全く無いわね」

「江川さんだけじゃなくて、あの観光バスに附いても誰も記憶してなかったようだな」

「わたくし、先ほどドライブインの駐車場で4、5台停まっていたバスの一番端に、あの事故を起こした旅行代理店の名前の付いたバスを見たのです。運転手も誰も乗ってなかったのですが、事故とは直接関係ないと思って、そのまま気にも留めなかったのですが、今記憶を辿ると、一寸奇妙なイメージが浮かんでくるのです。前の方の座席が前側に倒れていて、中程の座席も1カ所前に倒れていたようでした。よく考えると、リクライニングなら、後ろに倒れるはずなのに。その時は意識が他の方にありましたから、そのバスのことは映像としてしか記憶にありませんが……」

「えっ。それはもしかしたら、事故を起こしたバスじゃないか？」

「そうよ。確かガイドさんが乗っていたのが前の席で、その座席が変形したって言ってたし、確かもう一カ所椅子の壊れ掛けたところがあるって言ってたわよね」

「そうだとすると、なぜ、あそこに事故を起こしたバスがあるのかしら？もうとっくに片付けてしまったはずなのに」

「俺は気付かなかったな。いずれにしても、一寸戻ってみよう」

賢は道路の安全地帯を使って車をUターンさせた。ドライブインには10台ほどの自家用車と三台のバスが駐まっていた。

「あら、さっきのバスは停まってないわ。確かに、その辺りに停まっていたんですけど」

「もう一度下りて調べてみよう。祐子はデジカメでこの辺りの写真を撮っておいてくれよ」

「分かったわ」

まず、賢が車を降り、反対側のドアを開けてやった。しかし、降りるときに手を引いてあげることにはしなかった。それでも、ふたりの女性はエスコートをされる度に少し心地よさを覚えたが、自分が一番大切に扱われているかどうかは気になった。

「亜希子さん、そのバスはイメージがしっかりしていた？ぼーっとしていることはなかった？」

「あまり、はっきり記憶に残っていないのです。少し待ってください。もう一度記憶を辿ってみます。・・・そう、隣のバスの陰になってタイヤの周りにははっきり分かりませんでした。ぼやけてはいなかったと思います。でも、後方の記憶はありません」

「一寸待って、亜希子さん、どうしてバスの中がそんなに良く分かったの？」

「わたくしにも分かりませんが、バスの外側と座席の様子、・・・それに荷物が床に置いてあるのが見えました。確かにそうですね。外から見えるはずもないのに。でもそのイメージが記憶に残っています」

「何かおかしいわね」

「でも、赤谷さんはここに停車したって言ってたわ。その後で環状道路を走って行って沢に落ちたってことよ」

「もしかすると、その沢はこの環状道路沿いにある沢じゃないんじゃないか？」

「そんなはずないわ」

「実体としては無いかも知れないけど、今の亜希子さんの記憶のイメージのような体験ならあり得るな」

「わたしはこの辺の写真を撮っておくわ。亜希子さんがバスを見た辺りの写真も撮るわ。亜希子さんどこから見たのかしら？」

「そう、そこの乗用車が停まっている辺りかしら。この車の停まっていた処に戻って来た時でしたから」

祐子はその位置に立って亜希子がバスの停まっていたと言う辺りの写真を撮った。大山が背景の中心に写った。まるで富士山の姿を思わせる雄姿が祐子の目に映った。空は抜けるように青く、そして深かった。

「ここから見る大山は伯耆（ほうき）富士とか出雲富士とか呼ばれているのよ。古事記を読んだことあるでしょう。火瓊々杵（ほのににぎ）尊が天から下りて来て、機を織っている美しい娘木花開耶姫尊を見初めて結婚したのよ。その娘のお父さんが大山祇神尊というのよ。この神様は日本全体を守る神様よ。大山はその大山祇神尊の御本柱が住まわれた山とも言われているのよ。それでね、その木花開耶姫尊は富士山の主神になられたの。ここも富士と呼ばれることがあるのはその為かも知れないわね」

祐子は独り言のように話した。賢と亜希子は暫く大山を眺めていたがその内、亜希子が、

「賢さん、手を繋いでいただけますか？わたくし、少し不安定で」と言った。賢は左手でそっと亜希子の右手を握った。意識が大山に吸い込まれてゆくような感じがした。亜希子は意識が遠のいてゆくような感覚を覚え、それに抗するために意識を強めようとした。しかし、膝が折れてその場に倒れそうになった。賢は亜希子が倒れ掛かるのを自分の胸に抱き留めた。亜希子の身体は柔らかく、まるで骨を抜かれたようにぐったりしていた。亜希子は完全に意識を失っているようだった。

「亜希子さん、大丈夫か？」

祐子が駆け寄って来た。

「どうしたの？」

「亜希子さんが意識を失って倒れそうになったんだ」

賢は亜希子を抱えながら車のドアを開け、後部座席に横たえた。亜希子は安らかな顔をしていて、ほとんど呼吸をしていないようにも思えた。

祐子が手を近付けて、吐息を確認した。

「呼吸は大丈夫そうね。・・亜希子さん、亜希子さん、どうしたんですか？」

祐子の声で亜希子は気付き、ゆっくり首を持ち上げた。

「・・・わたくし、どうしたのかしら。あの山を見ていたら、自分がある山になったような気がして、力が抜けていってしまったの。でもとっても気持ちが良かったのよ。身体が軽くなって、どこか別の場所に飛んで行ったような感じがしていたわ。・・・ごめんなさい」

「少しそのままになっていた方がいい」

賢は、そう言うとドライブインの方に駆け出して行って、炭酸水のペットボトルを手に直ぐ戻って来た。

「亜希子さん、これを飲んで。冷えているから、意識がはっきりするよ」
亜希子は頷いて、炭酸水を一口飲んだ。

「賢さん、わたくしの手を握っててください」

祐子は複雑な気持ちを抱いたが黙っていた。賢は右手で亜希子の左手を軽く握った。亜希子は少し目を閉じてから二度深呼吸をして、賢の手を頼りながら起きあがった。

「ここは、何となく特別な場のようなのだな。俺もあの大山に吸い込まれてゆくような感じを覚えた」

「賢くんと亜希子さんは感受性の点でどこか共通しているところがあるわね。ふたりともとても場の状態に敏感に反応するようだわ」

「確かにそうだ。あのレストランでのことといい、県立美術館でのことといい、同じような反応をするな」

「はい、わたくしは弱いのでしょうか、その反応が身体にまで及ぶようです」

「気分は良くなった？」

「はい。気分が良くなったと言うより、意識がいつもの状態になったといった感じです」

「そうか。そうだな。・・兎に角、まず昼食を摂ってからあのバスの転落した処に行ってみよう」

「そうね。亜希子さん、もう大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

三人はドライブインで食事を済ませた。3人ともサンドウィッチと、この高原で獲れる牛乳を頼んだ。

「賢さん、傷は大丈夫ですか？」

亜希子が言った。

「もうすっかり大丈夫だよ」

賢は包帯の巻いてある右手を出して見せた。

「俺はこの大山、好きだな。ずっと昔の故郷に来たような気がして」
祐子が言った。

「この山には登山家が大量訪れているのよ。多くの人に好かれている山のようよ」

「わたくしも惹かれます」

三人は食事を済ますと、車に戻った。賢は二人に少し待つように言い、先ず運転席に半身を入れてエンジンを駆けた。エアコンがフル回転になると、ドアのスイッチを操作して4つの窓をすべて解放した。それから反対側に行き、助手席のドアを開けた。熱気が吹き出して来るようだった。賢は祐子が乗った後、ドアを閉めてあげてから、後部座席のドアを開け、亜希子の手を取って中に入るまで支えてやった。それから、静かにドアを閉めた。祐子は「そんなにしなくても大丈夫なのに」と心の中で思ったが、自分のハンドバッグを開けて中からハンカチを取り出すと、さりげなく額の汗を拭いハンカチを元に戻した。さも賢の行動を気にも留めていないかのようなようだった。二人の女性は車に乗ると麦わら帽子を脱いだ。祐子はそれを膝の上に、亜希子は座席の横に置いた。

「賢くん、バスの落ちた位置分かるの？」

「うん。笹倉さんが言っていた位置は大体分かる。一の沢、二の沢、三の沢を越えて、鍵掛峠に至る道の途中だと思うけど、その辺りになったら少しゆっくり走ってみるよ」

暑い日差しの中ではあったが、車の中はクーラーが効いてきて、一気に別天地になった。10分ほど走ると一の沢にかかった。この辺りは路肩

がはっきり分からず、確かに脇見運転は危険だと思われた。三の沢を過ぎるとカーブがあり、カーブの左路肩が崖になっているところに出た。その辺りから少しスピードを落として走った。崖側のブナの木が倒れ込んだような部分に来た。賢はここだと思った。バスが落ちたと思われる場所から10メートルほど離れたところに路肩が広がったところがありそこで車を止めた。後に附いていた三台の車が追い越して行った。

「ここがそうね。木が倒れているもの」

「うん。確かにここだと思う」

賢は先ず自分が降りて足下の安全を確認し、反対側のドアの方に廻ってドアを開けてあげた。祐子は元気よく出て来た。亜希子は少し不安そうだった。賢は亜希子の手を取って降りるのを助けてやった。祐子は「まだ、だめなのかしら」と思ったがそんな素振りは見せず、デジカメであちこち写真を撮った。

「賢くん、沢に降りてみるの？」

祐子が言った。

「よし、少し大変だけど行ってみるか？君たち人はここに残って待っていてくれ」

ふたりは頷いた。賢は一人で崖の間にある細い山道を降りて行った。五分程で沢に出た。そこは小石を敷き詰めたような広い沢だった。賢はこの辺りにバスがあったはずだと思った。沢の中央に水が流れていた。その水の周りの岩が水気を含み一日の涼を与えている。確かにテレビで見た場面に似ていた。しかしバスが落ちた痕跡は見当たらなかった。賢はしまったと思った。祐子からデジカメを借りれば良かったと思った。と思う間もなく祐子の声がした。

「賢くーん！写真を撮っておかなきゃ」

「おい祐子、足は大丈夫か？」

「平気よ、ちゃんと運動靴で来たもの」

賢は用意周到な祐子に感心した。

「亜希子さんはどうした？」

「不安だから、残るって言ってたわ」

祐子は写真を撮り賢は辺りを調べたが、実体としても、感覚としても特に変わった何かは発見できなかった。祐子は甘えるように賢の左手を自分の両腕で抱き抱えた。じっと我慢していた感情が爆発でもしたかのようであった。暫く辺りを観察してから、賢は祐子の手を引いて降りて来た坂を登り始めた。

「祐子、膝は痛くないか？」

「大丈夫よ、これくらい」

ふたりはやっと崖を登り切った。賢は祐子の手を離し車の処に戻った。亜希子の姿が見えない。

「あれ、どこに行ったのかな？」

後から祐子がやって来た。

「さっきはここにいたわ。暑いから、木陰に入った方がいいって言ってたわ。でもここには木陰は無いし、・・・」

「車に乗っていればよかったのにな。エンジンを駆けておいたから涼しいのに。どこに行ったんだろう。変だな、どこにも行く処は無いしな」

「そうね。沢に降りるしかないわ。それか、この道路を歩いて・・・無理ね」

その時、一台の自家用車が通り過ぎた。

「大丈夫だろうか？」

ふたりは亜希子を探した。そこは一本道の山道だった。そこから他の場所へ移動するには崖をよじ登るか、沢に降りるかしかなかった。賢は亜希子がふたりの後を追って沢に降りたんだろうと思った。

「祐子、少しここで待っている。俺はもう一度沢に降りてみるから」

賢は急いで崖を降りて沢に出た。やはり亜希子の姿は見当たらなかった。賢は沢に沿って少し下ってみた。大きな声で2度「亜希子さーん・・・亜希子さーん」と亜希子呼んだ。一本の大きなブナの木があり、枝が傘のように広がって涼しそうな日陰を作り出していた。そのブナの木陰の石の上に亜希子が座っていた。賢は小石に躓きながら急いで、亜希子に駆け寄った。

「亜希子さん、どうしてここに？」

「あっ、賢さん、わたくしにも分からないのです。少しぼーっとして
いて、今あなたの声で気が付きました」

「えっ！これは、テレポーションじゃないのか？」

「わたくしにもよく分かりません。賢さん達が崖を降りて行かれたとき
に、わたくしも「車から降りて一緒に行きたい」と強く感じました、感
じたというより欲したといった方がいいかもしれません。でも、歩く自
信がなくて、せめて賢さん達が見える木陰で待ちたいと考えました。道
路の周りには木陰が無かったので、賢さん達が降りて行った崖の道の方
に行き下の方を覗き込んだのです。そしたら、フワッと身体が浮いたよ
うな気がして、気が付いたら賢さんの呼ぶ声が聞こえて来ました」

「そうか、そうするとテレポーションとは限らないな。自分で降りて
来た可能性もあるな」

「わたくしには分かりませんが、でも、あまり時間が経ってないように
思います」

「亜希子さん、本当は一時間くらい経っているんだよ。その時の状態を
もう少し詳しく話してくれないか。特に意識の動きをね」

賢は亜希子の右隣に座った。岩があまり大きくなかったので、亜希子は
少し身体を横にずらした。賢と亜希子の身体はほとんど密着する程だっ
た。亜希子が言った。

「賢さん、わたくしの手を握っててください。わたくしとても怖いの
です。先ほどのドライブインと謂い、ここでの状態と謂い、自分がどこ
かに行ってしまうようなので賢さんに捕まえていて欲しいのです」

賢は亜希子の右手を握った。

「ありがとうございます。あなたに手を握っていただくと、それだけで
心が安定します」

「うん。で、亜希子さん、崖の上からここに移動するときの意識の動き
を説明してくれないか？」

「はい。先ほども申し上げましたが、わたくしの意識の中には、自分が
崖を降りることはできないという挫折感に似た感情と、なんとか賢さん
と一緒に崖の下に降りたいという感情と、それから強い日差しを避けた

いという気持ちが同時に湧き上がってきました。その時の意識は明瞭でした。特に強かったのは賢さんと一緒に下に降りたいという感情です。あまり思考は働きませんでした。そうです、崖の下を眺めていた時、太陽が一層眩しくて目が開いていられなくて、くらくらとしたような気がしました。そして本当に崖を降っているような気持ちがしてきたのです。その少し後で身体がフワッと浮いた気がしたのです。自分としては歩かなかったと思うのですが。その後はこの木陰に自分が座っているのに気付いて次第に意識が明瞭になってきたのです。いいえ、正しくはその間に全く時間の経過がなかったように感じます」

「その時、身体の変化は無かった？」

「はい、特には感じませんでした。ただ、少し疲れたような気がします。でもそれは、崖の上にいる時とあまり変わらないかも知れません。あそこでも少し疲れた感じがしていましたから」

ずっと遠くで賢を呼ぶ祐子の声が聞こえた。賢は亜希子の手を引いて立ち上がり、亜希子を支えながら沢の石の上を歩いて崖の登り口まで来た。

「亜希子さん、登れるか？」

「はい、頑張ります」

「それじゃ、先ず亜希子さんが登って、俺が後からフォローするよ」
祐子の時は遅しさを感じたが、亜希子が崖に登る姿は心許ない限りだった。足場を確認することもせず不安定な岩に足を掛けるので、その都度賢が亜希子の足取りに注意しながら登らなければならなかった。途中何度も急勾配な場所を通った。賢は亜希子が登り切れない時は、下から亜希子の尻を押し上げた。亜希子も必死だった。賢が自分の尻を押すのを恥ずかしいと思ったが、その気持ちに抗うことはできなかった。賢は、祐子が登った時はそれほど苦労しなかった。祐子は完全に賢に頼っていたので、危険なところは自分から賢に言って補助してもらった。亜希子はなんとか自分で登ろうと必死だったが、体力的に附いて行けないという感じだった。途中で一度亜希子は足を踏み外した、賢は右手で灌木の枝を掴んでいたのも左手で落ち掛かる亜希子の身体を支えた。亜希子が賢に抱きついた形になった。賢の足場がしっかりしていなかったら、ふ

たりとも二メートルほど転落するところだった。賢は右手と左足で位置を保った。亜希子は

「ごめんなさい」

と言ったが賢に抱きかかえられて赤面した。しかし、直ぐに体制を立て直し、また登り始めた。道路が見えてきた時、祐子が少し降りて来ていて、

「大丈夫？」

と声を掛けた。賢は

「大丈夫だ。今上がるよ」

と応答した。まず亜希子の姿が見えてきた。

「亜希子さん、手を出して」

祐子は亜希子の手を引いて力を貸した。亜希子を引き上げるほど祐子も力持ちではなかったが、亜希子は祐子の援助を喜んだ。

「祐子さん、済みません。ありがとうございます」

続いて賢が上がって来た。

「祐子、声が聞こえたぞ」

「賢くん、返事がなかったじゃない」

「ごめんなさい。ご心配をお掛けしてしまって。その上、こんなにご迷惑を」

「俺たちは友達じゃないか。そんなこと、当然のことだよ」

「そうよ。でも良かったわ。亜希子さんも下に降りていたのね？」

「結果的にはそうなんだけど、自力で降りたんじゃないようだな」

「はい、わたくし自身よく分からないのです」

亜希子は崖下に移動した経緯を簡単に説明した。三人は車に戻った。車は無人のままエンジンが掛かった状態だった。賢は先ず祐子の為に助手席のドアを開け、祐子を車に乗せた。手を取って乗せてあげた。祐子の手は土で汚れ、あちこちに引っ掻き傷があった。祐子を乗せてからドアを閉めると、次に亜希子の為に後部座席のドアを開けた。亜希子の手を取って乗せようとする、亜希子は賢の左手を握りしめた。亜希子の手は祐子の手より更に汚れていて、あちこち小傷が付いていた。賢は亜希

子の手を取ったまま着席するのを助けてからドアを閉め、運転席に廻った。運転席のドアを開け、トランクのロックを外してから、再び運転席のドアを閉めた。賢はトランクから自分のスーツケースを引き出し、そこからティッシュペーパーとカット絆の箱を取り出すと、スーツケースを元に戻しトランクを閉めた。賢は運転席に戻り、先ずハンカチにドライブインで買ったイオン水を含ませ、祐子に「手を出して」と言った。祐子の左手を取ると、汚れを落としてやった。続いて右手も同じように拭いてやった。そして、祐子の湿った両手をティッシュペーパーで拭いてやった。それから後部座席を振り返り、「亜希子さん、手を出して」と言った。亜希子も左手から出した。賢はイオン水をもう一度ハンカチに染み込ませて手を拭いてあげた。拭うときに亜希子は少し顔をしかめた。手の甲の引っ掻き傷が滲みたようだった。賢は亜希子の両手をハンカチで拭いティッシュペーパーで湿り気を取ってから、カット絆を2カ所の引っ掻き傷に貼ってあげた。

「どこか痛いところはないか？」

ふたりとも首を横に振った。賢は自分の手を拭ってから、

「江川さんが消えたのも、今亜希子さんが空中移動したのも同じ現象のような気がするんだけど、どう思う？」

祐子が応えた。

「それはどういう意味で？」

「多分、亜希子さんは瞬間的に別の時空間に移動したんじゃないかと思うんだ。その別の時空間が何かは別として、そこに入ると何かのきっかけが無いと出て来れないような気がするんだけど、どうだろうか？」

亜希子が心配そうに言った。

「わたくし怖いわ。さっき賢さんが呼んでくださったから、意識が戻ったの。もし、賢さんが呼んでくださらなかったら……」

亜希子は言葉に詰まった。

「まだ、これは仮説に過ぎないから何とも言えないけど、一つの暗示と見てもいいように思うよ」

「でも、どうしてこの大山でこんなことが起こるのかしら」

祐子が不思議そうに言った。

「もしかするとDNAのスイッチの特性に絡む問題かも知れないな。DNAには30億の文字に相当する情報があるんだけど、それが身体を構成する情報なんだ。そして、その中に、スイッチ情報があるんだ。そのスイッチがONかOFFかでその人の特性が変わるんだ。亜希子さんのDNAの特定のスイッチがONし易くなっているって考えたらどうだろう。亜希子さんの場合、何かの条件が整うとDNAの特定の情報を伝えるRNAが機能し始めるんじゃないかな。そして特殊な能力が現れる。その時、身体もそれに同調する。しかし、別の条件が与えられると、スイッチがOFFする。そして元に戻る。こう考えると分かり易いな」

「でも、もしそうだとすると、わたくし自分が分からなくなってしまうのがとっても怖いわ」

「いずれにしても、今日はいいいヒントが得られた。そろそろ四時になるからホテルに行こう」

そう言うと賢はそのまま進行方向を変えずに車を走らせた。途中、鍵掛峠で景色を眺めた。そこから見る大山はその姿が雄々しくゆったりとして、まさに中国地方筆頭の名峰と言われる理由が分かるような気がした。亜希子はできるだけ大山に視線を固定しないように注意して景色を眺めた。祐子は大山の写真を何枚も撮った。スナップで賢の写真、亜希子の写真も撮った。賢に頼んで自分の写真も撮ってもらった。少しして黒のワゴン車が来て停まった。車から降りて来た若いカップルに賢を挟んで三人が並んだ写真を撮ってもらった。暫く新鮮な空気を味わってから、賢は車をUターンさせてホテルのある榊水高原に戻った。30分ほどで榊水の大山山の上ホテルに着いた。賢は車を駐車場に止めるとトランクを開け、ふたりを順にエスコートして車から降ろし、トランクから三人分の荷物を降ろした。日差しはまだ強かったが、空気が澄んでいて時々肌を掠める風が心地よかった。三人は揃ってホテルに入った。225、226、227号室の三つの並んだ部屋が割り当てられた。三人は部屋に入ると身繕いを整えて、30分後に下のラウンジに集まることにした。賢は包帯を外してシャワーを浴びた。

三人は時間を違えず正確に30分後にラウンジに集合した。吹き抜けになつた広い空間は、天井にスポット照明が幾つも付けられている。テーブルの置いてある領域が他の部分に比べて少し暗くなるように調光されていた。三人は窓際のテーブル席を選んだ。ウェイトレスがやって来て注文を聞いた。三人ともコーヒーを頼んだ。

「亜希子さん、気分はどう？意識は元に戻った？」

賢が訪ねた。

「はい、もう大丈夫です。でも、何か自分が自分でないような気がします」

三人は暫くの間コーヒーを飲みながらさっき起こったことを思い起こし、亜希子が瞬間移動した原因について話し合った。その現象には3つの大きな要素があることを確認し合った。一つ目は空間的に移動したこと。二つめは移動が瞬間的に起こった可能性が高いこと。そして第三の要素は亜希子はその経過を全く認識していないことだった。それはあのレストランで賢と亜希子が暫く見えなくなった時のふたりの認識に似ていた。現在の三人の認識力では理解できない内容であることに変わりはない。暫くしてから揃って散歩に出ることにした。夏の夕暮れの大山は三人をその懐にすっぽり抱いてくれた。ふたりの女性は何度も深呼吸をしながら歩いた。賢の左腕に祐子が腕を絡ませ、亜希子が賢の右手を握っていた。昼間は賑いを見せていた榊水高原が、夕暮れになると恰も生き物がねぐらを求めて帰巢してゆく時のような沈み行く雰囲気醸し出している。その落ち着きが心の底に浸み込んで、見ていると自ずと意識が静まるのを覚えた。暫く歩いてから三人は夕食を摂る為にホテルに戻った。食事を済ますと、明朝6時にラウンジで朝食を共にする約束をしてそれぞれ部屋に戻った。賢は直ぐに入浴することにして浴場に向かった。浴室は地階にあった。既に大勢の宿泊客が入浴していた。大きなガラス張りの窓から暮れてゆく大山の夕日を受けた姿がまるでシルエットのように見え、日没直後の山裾に掛かる空の紫色から天空の深い青色までの色の変化が浴場の人々の上に外の静けさを投げ掛けていた。賢はいつものようについ先ほどから今朝にかけての意識の動きを

逆に辿った。この日の経過は自分の意識だけで顧みるのが難しいと感じたが、できるだけ忠実に追ってみた。亜希子の意識の動きがよく見えてきた。あのテレポーションが起きてからの亜希子の意識が、かなり不安定になっていたのが気に掛かった。自分の意識に空ろな部分が無いことを確かめると、賢は湯から上がった。部屋に戻ると、ノートを取り出して、今日の意識の動きと状況の変化を書き綴った。およそ1時間ほどして、波のように眠気が押し寄せて来ては引いて行き、そのまま眠りに落ちた。しかし、寝ている間も意識ははっきりしていた。脳が今日の出来事を断片的に繋いだり、切り離している様子が見えるような気がした。バスの転落した沢から亜希子の手を引いて崖をよじ登っているときの光景が、スライドフィルムのように展開されてきた。崖の急勾配のところで賢は握っている亜希子の手を強く引いていた。亜希子が強く握り替えた。崖を登り切った時、賢が亜希子の手を握る力を緩めたが、亜希子は逆にもっと強く握り返してきたように感じた。スライドの情景と感覚がじっくり会っていない感じで、違和感を覚え、目を開けた。ベッドの左手に亜希子がしゃがみ込んで、両手で賢の左手を握り締めていた。亜希子はパジャマ姿だった。亜希子の手の手甲にはカット絆が、賢が貼ってあげた状態のままに貼られていた。剥がさずに入浴したようだった。眼を瞑り、まるで眠っているようだ。賢は驚いた。

「どうしたんだ。亜希子さん」

亜希子は直ぐには応えず、黙って賢の左手を握り締めていた。賢は右手で亜希子の左肩を揺すった。

「どうしたんだ」

亜希子ははっとして、

「賢さん、わたくしの手を強く握っていてください。自分がどこかに行ってしまうようで、怖くて」

「でも、どうやってこの部屋に入って来たんだ。俺は自分の部屋のドアをロックしたはずだ」

「わたくし、床に就いてからずっとあなたのことを考えていました。手を引いて頂いたこと、わたくしに優しくして頂いたこと。そして、自分

がどこかに消えてしまったらどうしようと思いました。なので、賢さんに手を握っていただいている状況を連想して眠ることにしたのです。次第に意識が薄れて、気が付いたらあなたの傍にいて、あなたの手を握っていました」

賢は咄嗟に亜希子がまたテレポーションを起こしたと思った。

「亜希子さん、分かった。今日はここで寝ろよ。手を握っていてあげるから」

そう言うと賢はベッドから降り、亜希子を促してベッドに寝かせた。そして、ベッドの縁にしゃがみ込み亜希子の手を握った。

「さあ、朝まで寝るといいよ。疲れているんだから。賢もうずくまった姿勢のまま亜希子の手を握りながら寝入った。意識は次第に薄れ、気が付いたときには亜希子の姿が無かった。賢は夢だったのかと思ったが、自分がベッドから降りてベッドに寄り掛った形でしゃがみ込んでいるので、夢ではないと思った。時間は6時を15分ほど過ぎていた。賢は急いで顔を洗い、衣類を着替えてラウンジに降り、奥のレストランに向かった。祐子と亜希子が中央付近のテーブルに座っていた。テーブルにはオレンジジュースと水の入ったグラスが2つずつ置かれていた。

「おはよう。遅くなってごめん」

賢が言った。祐子は「おはよう」、亜希子は「おはようございます」と応えた。賢はちらっと亜希子を見たが、亜希子は何事もなかった風だった。賢はやはり夢だったのかと思った。ふたりは賢が遅くなったことには触れなかった。

「賢くん、バイキングよ」

ウエイトレスがやって来て飲み物の注文を聞いた。賢はふたりのジュースを見て、

「同じものをください」

と言った。オレンジジュースと水が運ばれて来た。

「待ってたの。一緒に取りに行きましょう」

祐子が言った。賢は最初にバイキングの朝食を皿に盛り付けて席に戻った。次に亜希子が戻って来た。亜希子は賢の目を一瞬見据えて、微笑み

を返した。亜希子の顔には安心感が漲っていた。祐子も戻って来た。大皿に朝食を盛り、小皿にフルーツを取って来た。

「賢くん、これどうぞ」

そう言うとフルーツの小皿を賢の前に置いた。そして、再びバイキングのコーナーに戻り、フルーツの小皿を二つ持って戻って来た。

「亜希子さん、フルーツは？」

「ありがとうございます。いただきます」

祐子は小皿をテーブルに並べて席に着いた。祐子のこのような一寸した気遣いに、賢はいつも心温まるものを感じた。亜希子の手の甲からはカット絆が剥がされていた。傷跡は幽かに残っていたが、跡が残るほどではなかった。賢は昨日の夜の出来事が夢であると確信した。

「君たちも気付いたと思うが、江川さんはやはりこの空間から消えたと考えるのが自然だと思うんだ。昨日俺が呼び掛けた時、亜希子さんの意識が戻っただろう。呼び掛けたら彼にも伝わる可能性があると思うから、今日もう一度あそこに行って江川さんに呼びかけを行ってみようと思うんだが、どう思う？」

亜希子が応えた。

「わたくし、是非賢さんがおっしゃる様に、呼びかけを行ってみたら良いと思います。これまで、わたくしの意識が戻ったのは、いつも誰かに呼ばれた時ですもの」

祐子も同意した。

「ところでね、今日、わたし宿が無いのよ」

と祐子が言った。金曜日である。八月の連休で予約が難しいのは分かっていた。それでも無理矢理来た。何とかなると祐子は思っていた。朝食を済ませてから、賢と祐子はチェックインカウンターで宿泊の可能性を打診したがやはり無理だった。祐子はふたりにソファで休んでいてくれと言い、携帯電話を持ってチェックインカウンターの横に設けられているサービスカウンターに向かった。亜希子が言った。

「賢さん。昨夜はありがとうございました。朝までぐっすり眠れました」

「えっ。本当のことだったのか？それで、部屋に戻れたのか？」

「はい、わたくしの部屋の鍵は内側から掛かっていましたので、ホテルのフロントにうまく説明して合鍵を借りました」

「賢さん、あなたは本当に優しいお方です」

「いや、眠れたのならよかった。俺はてっきり夢だと思ったよ。でも、どうして亜希子さんの意識が戻ったのかな？そうか、多分俺が夢の中で崖を登るとき、亜希子さんの手を引いたからかな。確かその後で手に違和感を覚えたんだ」

その時、祐子が戻って来た。

「ここはだめだったけど、この近くのペンション村にあるペンションに一部屋確保出来たわ」

祐子は宿だけでなく昼食も確保していた。握り飯六個と、ペットボトルのお茶三本をビニール袋に入れて持って来た。祐子が「ペンションは設備の点でこのホテルよりかなり劣るようね」と付け加えた。賢は「自分がペンションに泊まるから、女性ふたりはここに泊まるといい」と言った。ふたりはそれぞれに複雑な心境だったが承諾した。賢は急いで部屋に戻ると、三十分ほどしてから荷物をとりまとめて降りて来た。チェックアウトカウンターで精算を済ますと、祐子が宿泊する部屋の確認を行っていた。ふたりの女性は麦わら帽子を被り、それぞれハンドバッグを手にして出て来た。賢は自分の荷物をトランクに入れ、ふたりの女性をエスコートして車に乗せた。9時20分頃だった。

一行は昨日と同じ大山環状道路のバス転落現場に立った。賢がふたりに向かって言った。

「まず、俺がやってみる。暫く意識を自然の植物に移しておいてくれないか」

初め賢は声を出して江川を呼んだ。三十秒ほどの間隔を置いて、再び声を出して呼んだ。それを二十回ほど続けた。しかし、何も変わったことは起こらなかった。賢は言葉を発するのを止め、心で江川を呼んでみた。同じ回数を行った。やはり何の現象も現れなかった。続いて、祐子が、呼びかけを行った。しかし、変化はなかった。最後に亜希子がそれを行おうとしたとき、賢が

「亜希子さんは止めた方がいい。亜希子さんの意識は微妙だ。今それを行わない方がいいと思う」

と言った。亜希子も本当は怖かった。自分がまた消滅してしまうかも知れないと思った。しかし、自分だけが特別扱いされるのもいやだった。亜希子は賢に

「賢さん、わたくしの手を握っていただきますか？」

と言った。祐子は不快感を覚えたが、黙っていた。賢は亜希子の手を取った。亜希子は

「江川さーん」

と呼びかけを行った。何も変化しなかった。亜希子は祐子と同じようにそれを繰り返した。しかし、空も、木々も、道路周辺の人工の構造物も、何ら変化の兆候を示さなかった。自然は静かに三人を見守っているかの様であった。亜希子は心の中での呼びかけは止めた。それは賢に手を握ってもらっていても、その不安から逃れられない為だった。三人は不確かな推測に基づいて不確かな実験を行い、その結果からはなんら手掛りが得られなかったことを知りこの試行を諦めた。そして、大山の周辺を観光することにした。まず柗水高原を散策した。まだ夏の日差しが強く、白いササユリがぼつぼつと咲いている。その咲き始めた白い見応えのある百合の花が夏の大山の雄姿を一層引き立てている。賢は握り飯と、お茶の入ったビニールバッグを手にして歩いた。亜希子が

「白い花は、大山の雄々しさに似合うと思います」

と言った。賢と祐子は相槌を打っただけだった。草原の中を三十分ほど散策した。祐子が賢の右腕に腕を絡ませると、決まって亜希子が賢の左手を求めた。三人はベンチを探し、腰掛けて祐子の用意していた握り飯を食べた。食べ終わるとまた三十分ほど車で走り、大山寺という寺に着いた。横道には自然石を敷き詰めた階段があった。その階段を登ってゆくと途中に金門という案内板があり、そこを曲がって神域と謂われる金門に辿り着いた。賢は祐子の膝を気遣ったが、祐子は「大丈夫」と言った。その言葉を聞いて、亜希子は賢の左手を握り締めた。そこは小石がばら撒かれた澤のような場所で、頭上に岩壁が迫っていた。大山の切り

立った北壁だった。兩岸の絶壁に挟まれたこの場所からの眺めは、大山の中でも取り分け厳かな、大自然に対する畏敬の念を人に抱かせる場所だった。そこにいると本当に神々が降りてくるのではないかと思うような、身体を突き抜けるような荘厳さを感じた。三人は暫くその場に落ち着き、少ししてまた参道に戻って大神山神社まで登り参詣した。大国主命を祀った神社である。国弊社として多くの信者を持つ寺であることが説明板に書かれていた。この寺の菖蒲も紫陽花も既に最盛期を過ぎていて、6月にはさぞ美しく咲き誇ったであろうと思われる面影を残していた。

「亜希子さん、紫陽花なんかも生けるの」

祐子が聞いた。

「わたくし、紫陽花は大好きなのですが、生け花に生けることはいたしません。紫陽花は自然の中で露を含んで咲いている姿が一番美しいと思います」

と言った。賢は「そうだな」と思った。祐子は

「わたくしは菖蒲が大好きよ。あの紫色が好きなの」

と言った。祐子には菖蒲もハイビスカスも似合うと賢は思った。祐子は美しかった。赤い薄地に黄色い襟のブラウスを着ている。赤いブラウスから少し下着の影が浮き出ている。愛らしいと思った。賢はふたりをエスコートして車に乗せ昨日のホテルに戻った。亜希子は賢の手を頼って車から降りると寂しそうな顔をした。祐子も同じようにエスコートされて降りたが、さばさばして降りで直ぐ賢にしがみ付いた。賢は軽く祐子を抱きしめて引き離し、

「ふたりで大丈夫か」

と訊いた。ふたりは頷いたが、亜希子は少しく不安そうな様子を隠せなかった。賢はふたりをロビーまで送って車に戻った。ふたりは賢の車が見えなくなるまで見送っていた。

「亜希子さん、少し時間があるけど、今日は疲れたから部屋でのんびりしましょう」

祐子が言った。

「はい。それでは、お食事の時に会いましょう。六時でよろしいでしょうか？」

亜希子は即座に応えた。ふたりは別れた。亜希子は直ぐに部屋に戻ったが、祐子は土産物の売店を見て回った。民話集を探したが、見当たらなかった。祐子は数馬と亮子にみやげをと思った。白ウサギのまんじゅうを買った。「一寸ダサイな」と思ったが、ここではこれが一番と思って、二箱買って部屋に戻った。賢はそこからペンション村まで車を走らせた。目的のペンションはなかなか見つからなかった。大きなペンションの陰にある小さなコテージ風のペンションだった。入り口も普通の家の玄関とさほど違わない広さだ。一階の食堂とラウンジを兼ねたスペースも十坪程度の広さだった。建物は二階建てで、部屋数も十二室と少なかった。チェックインを済ますと、賢は直ぐに部屋に入った。「今日は特に変わったことはなかった」と思ったが、ノートを出して、意識と状況の変化を記録した。夕食までにはまだ時間があつた。賢はもう一冊のノートを取り出し、1ページ目を読み返した。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た、
街の冷たい水のしたたりが、
わたくしの魂を凍らせてゆく
空は青、草は緑に、血の色は赤、
水は透き通って、
それでも、わたくしの中を巡る
彷徨える心は、
わたしから離れ
あなたを求め
こなた、かなたを追いかける
いまあなたに巡り逢い
心は戻り
わたくしの内なる太陽は
麗しき亜子を産み落とす

あなたは幣を手に
静かな鏡面に祈る
水面にひと滴の涙が落ち
波は無限に広がり
辺り一面
花が咲き乱れ、
ふたたび時はながれはじめる
ああ

賢は「彷徨える心は、わたしから離れ あなたを求め こなた、かなたを追いかける」の一節が場と場の間を彷徨する様を唄っているのではないかと考えた。その後の「いまあなたに巡り逢い こころは戻り」の一節は自分の心の波長に同調する人が現れた時に安定状態に戻れることを言っているのではないかという気がして来た。あの早瀬由美が今も滝の磁場の中に迷い込んで、そこから抜け出せないのは、自分の波長に合う人間が見い出せないからなのではないかという気がして来た。自分が早瀬由美と交信できたのは、自分の基本波は早瀬由美と異なっている、高調波が同調したのだと思った。賢は以前からすべての人は自分の固有振動を持ち、その波長が全く同じである人間と同調でき、それが基本波同士の場合は二つの魂が一体になれるのだと思っている。それでも高調波成分だけでも同調できれば、心からのコミュニケーションは可能とも考えている。ここまでは何とか解釈できたような気がした。しかしその後の「わたくしの内なる太陽は 麗しき亜子を産み落とす あなたは幣を手に 静かな湖の鏡面に祈る」は全く何を意味しているのか分からない。連想されるものがこの三次元的な社会での出来事に限定されてしまうことは止むを得ない。しかし出産のことを言っているのではなさそうに思われた。一旦場的に不安定な状態になり、そこで完全な調和の元に一体化が果たされると何かが創造されるのだ。そこまで考えて賢は思考を中断した。湯に入ろうと思った。浴場は二坪ほどの狭い場所であった。タイル張りの銭湯風の造りだった。人は誰も入っていなかった。賢はいつもの反省を行った。ふたりの女性を大山山の上ホテルに降ろした時の、

自分の意識の動きを読んだ。引っ掛ったのは、亜希子の不安定な状態への意識と祐子への労りの意識だった。そして、最も大きく申し掛かってきたのは、バスの転落現場で江川に呼びかけた時の意識の集中とその結果であった。何も起きなかったのは、呼び掛けの方法が間違っているか、あるいはそもそも呼び戻すと言う考え自体が間違っているからではないかと思った。風呂から上がると、直ぐ部屋に戻った。ホテルに比べてずっと狭い空間だ。それでも部屋に電話とテレビは置かれていた。洗面台やトイレは設置されていなかった。隣の建物の壁に邪魔されて、部屋の窓からは感動を与えるような雄大な自然は望めなかったが、窓に近付くと両脇から大山の裾野を望むことはできた。賢は暫く瞑想することにした。一人で静かに瞑想できるのは久しぶりのことだった。賢は自分の内側に入って行こうとした。その時電話が鳴った。祐子だった。祐子はホテルの部屋や設備のことを訪ねてから、「ごめんなさい」と言った。夜散歩に出ようという誘いだった。賢は不案内な土地、それも山中の運転に自信は持てなかったが了解した。食事を済ますと直ぐに出掛けた。時間は七時半を少し廻ったところだった。まだ外は明るい。西の空に日が沈んでそれほど時間が経っていなかった。昼間の強い日差しの影響はほとんどなくなってきていた。賢が大山山の上ホテルに着いたとき、祐子と亜希子がエントランスの脇に立っているのが見えた。賢は祐子だけと思っていたので、亜希子の姿を見て安心した。亜希子だけを残して散歩に出ることには、少なからぬ不安を覚えていた。駐車場に車を停めてふたりの処に行った。

「賢くん、あんまり気持ちがいいから一緒に散歩したくなっちゃって」

「そうだな。もう食事は済ませたのか？」

「うん」

亜希子が遠慮がちに言った。

「わたくし、一人でいるのが心許なくて。祐子さんに附いて来てしまいました」

「高原の方に歩いて行こうか？」

ホテルの周辺は夜間も散歩ができるように所々に街灯が設けられてい

て、ベンチも置かれている。祐子は賢の右腕を抱え込んだ。賢は既に包帯を外して絆創膏で傷口をガードしていた。賢は左手で亜希子と手を繋いだ。祐子は賢に身体を着けて歩いた。亜希子は賢の右に祐子がいることを忘れてるように楽しそうに歩いた。まるで、賢と祐子が夫婦で、父親が子供の手を引いて歩いている様だった。時々吹いて来る風は湯上がりの賢の身体を冷やした。

「ねえ、あそこのベンチに座らない？」

祐子が言った。三人は歩いて来たままの形でベンチに腰掛けた。

「こうしているとこの世界に俺たちだけのような気がしてくるな」

空は次第に青から黒く、深くなってきていた。祐子はふたりきりならよかったのと思った。亜希子は賢といるだけで嬉しかった。祐子は賢の肩に首を凭れ掛けた。亜希子はただ賢の手を握っているだけだった。賢はふと、「ふたりの女性とこのままでよいのだろうか」と思った。意識を祐子に向けると、この上なく愛おしいという感情が湧き上がる。意識を亜希子に向けると「なんとか守ってやらなくては」という気持ちになる。結局それでいいのだと思って妥協してしまった。

「今日の江川さんへの呼び掛けで、一寸気付いたことがあるんだ。もし、場が原因で消滅したとすれば、呼びかけがうまく伝わるには、呼びかける側と呼びかけられる側の意識が向き合う必要があると思うんだ。相手が気付こうとしていなくて、相手の意識が全くこちらを求めていないときは、よほど強い衝撃が届かない限り気付きは起こらないんじゃないかな。ふたりの意識が一つになったとき初めてそれが起こるような気がする」

「江川さんの意識がこっちを向いているはずないわね。でも、なんとか今いる状況から抜け出そうとしているんじゃないかしら」

祐子は賢の右腕を自分の身体に引き付けるように抱え込みながら言った。

「江川さんが自分で抜け出すことを強く意図すれば、結果的には抜け出せると思うんだ。俺が疑っているのは、彼の意識がそれをあまり望んでいないんじゃないかということだ」

亜希子は黙ってふたりの会話を聞いていたが、その間もしっかり賢の手を握っていた。

「亜希子さん、あなたレストランで消えたときはどうだったのかしら、どうして気付いたの？」

「わたくし、自分では消えたという意識は無いのです。ただ、手洗所に入った時、そこに賢さんがいらっしゃったので、ふと振り返ろうとして……あの時は、わたくしが消えたと言ったと皆さんが仰る意味が分かりませんでした。確か、チーフがわたくしを呼んだので返事をしました。だから、意識があったとか無かったという感覚は無いのです」

祐子は亜希子を意識して、心に引っ掛っていることを少しでもはっきりさせたかったのだが、亜希子の答えは、祐子の心を一層掻き乱す結果となった。三人は暫くベンチで空を見上げたり、日の落ちた後の残った光の影を追ったりしていた。九時近くになって、賢はふたりをエスコートしてホテルのロビーまで送った。そこで三人はそれぞれ心に静かな満足感を覚えて分かれた。賢はペンションの部屋に戻ると、直ぐに衣服を脱ぎ捨ててベッドに身を投げ出した。意識が冴え渡って眠れなかった。部屋の灯りはすべて消してある。窓から漏れ来る光は、隣の建物の屋根の上に散りばめられた星の灯りだけだ。これまで星の輝きがこれほど明るいと感じたことはなかった。ふと亜希子のことが意識に上がってきた。自分を頼る亜希子が心配になった。祐子のことは頭に浮かばなかった。亜希子の自分を見る澄んだ瞳が夜空の星にまで突き抜けるような透明さを感じさせた。賢は少しうとうとしてきた時、ベッドの傍に人影を感じてぎょっとした。亜希子だった。昨日と同じパジャマ姿だった。賢は意識がはっきり醒めた。部屋の照明は入り口にあるのでそこまで立ってゆくのは憚られた。

「亜希子さん、どうしたんだ」

亜希子は応えなかった。

「亜希子さん！亜希子さん！」

賢は亜希子の右手をとって振った。窓から漏れ来る星の光は亜希子の姿が遮り、賢には部屋が漆黒の闇と化したような感覚を覚えた。亜希子は

我に返ったように

「賢さん、今夜も一緒にいてください。わたくし・・・」

と言って賢の胸に飛び込んだ。賢は黙って亜希子を抱きしめた。亜希子の激しい心臓の鼓動が伝わって来た。賢は亜希子をそっと引き離すと、その手を引いてベッドに戻り亜希子を上に寝かすと、ベッドに向かって俯せるように寄り掛かった。亜希子は寝返りを打つように賢の横に身体を寄せた。賢は亜希子の右手を握って、反対の手でそっと亜希子の髪を撫でた。幼子を寝かしつけるように黙って髪を撫でていると、亜希子はすぐに寝息を立て始めた。翌朝目が覚めた時、賢は亜希子の手を握ったままだった。賢は少し握る手に力を込めた。亜希子が静かに眼を開いた。顔には安心感と子供のようなあどけなさが残っている。賢は亜希子に言った。

「安心して眠れたか？これから、何事も無かったようにしよう。ここのペンションの管理人に気付かれぬように抜け出して、君は直ぐにホテルの君の部屋に戻るんだ」

「わたくし、部屋の鍵を持っています。昨日のようになるかも知れないと思って、パジャマのポケットに入れておきました」

「そうか、それは助かった」

「亜希子さん、パジャマの上からでいいから、他の人が分からないように、俺のズボンとシャツを着てくれないか」

そう言うと、賢はスーツケースの中からトレッキング用のロングパンツと襟のある登山用のシャツを取り出した。亜希子は直ぐにパジャマの上からそれを身に着けた。賢の衣類を身に着けるといふ気持ちで、亜希子の胸の鼓動は激しくなった。亜希子はダンディな女性に変身した。

「これで、よし・・・じゃ行くよ」

亜希子は自分の身だしなみを気にしているようだったが、賢は構わず車の鍵と部屋の鍵、免許証を手にしてドアに手を掛けた。その時、不意に亜希子に対する愛おしさが募ってきて亜希子を抱き寄せた。亜希子も賢にかじり付いた。亜希子の心臓は激しく音を立て始めた。ふたりは少しの間抱き合ってから静かに部屋を出た。それから、さも散歩をするかの

ような雰囲気を装ってさり気なくペンションの外に出た。まだ夜が明け始めたばかりで、薄く霞が掛かっている。辺りの木々は朝露に濡れ、高原の清清しさを演出していた。亜希子は「木々達は眠らずに目覚めているのかな」と思った。誰も気付いた者はいないようだった。賢は亜希子をエスコートして車に乗せた。まだ車の通っていない車道を走り、ホテルに着いた。賢はホテルの入り口に祐子の姿を見付けた。しかし、そのまま車を駐車場に入れ亜希子をエスコートして降ろした。ふたりは祐子の視線を感じた。祐子が近付いて来た。

「あら、どうしたの？」

「祐子、早いじゃないか。亜希子さんが夜着のままテレポーションして俺の部屋に来てしまったんで、今パジャマの上から俺のシャツを着てもらって部屋に連れ戻すところだ」

「えっ。亜希子さん、大丈夫？」

「はい。わたくしにも何が何だか解りません」

「兎に角、人が起き出して来る前に早く部屋に戻らなくては・・・」

賢は亜希子の手を引っ張るように引いてホテルのエントランスを入った。カウンターにいる男性が不審そうにふたりを見ていたが、何も言わなかった。賢は軽く会釈して亜希子の手を離し、

「それじゃ後で」

と言った。亜希子がほんの少し首を縮めたように思った。賢は暫し亜希子を見送って直ぐに外に出た。祐子が待っていた。

「賢くん、大変だったわね」

と言ったが、顔に表れている狼狽の色は隠せなかった。賢は

「祐子、じゃ、俺は食事をしてチェックアウトしてから戻って来るから、君たちもチェックアウトしといてくれよ」

と言って車に戻り、そのままその場を立ち去った。祐子は賢の車が走り去るのを呆然と見送っていた。賢は部屋に戻ると、暗闇の中で賢に身を委ねて来た亜希子の激しい心臓の鼓動が、鮮やかに蘇ってきた。亜希子は不安と喜びに震えていた。今まで父親以外の男性と一緒に食事をしたことすらない女性が、独身男性と一緒に一夜を過ごすということは誰が

見ても尋常ではない。誰に対しても申し開きができるはずはなかった。亜希子の気持ちをここまで引き込んでしまったことに責任を感じた。それでも、賢は亜希子を遠ざけるつもりはなかった。しかし、もしこんな状態が続いたら一線を超えてしまう危険性があると思った。賢は急いでチェックアウトの支度を調べ、朝食を摂る為に下に降りた。食事を用意してくれたのはペンションの主人のようだ。

「おはようございます。朝食はどう致しましょう」

「こちらのお奨めの食事をお願いします」

「かしこまりました。お客様、朝早くどちらかに参られましたか？お車でお出掛けになられたようですが」

「済みません。友達が山の上ホテルに泊まっていて、一寸用事があったもので」

「そうでしたか。何かあったのかと心配しましたが、安心致しました」
賢はやはり見られていたのかと思った。しかし、そこで会話が切れたのでほっとした。チェックアウトの支払いが現金だった。賢がホテルに着くと、既に祐子と亜希子が荷物を手にしてエントランスの外に出ていた。ふたりは少し離れて疎遠な感じで佇んでいた。言葉も交わしていないようだった。賢は車をエントランスの前に停めると、車から降りトランクを開け、ふたりの荷物を載せた。そして祐子の脇に来て助手席のドアを開けてから、祐子の手を取ろうとした。しかし、祐子はそれに気付かないふりをして自分で車に乗った。祐子は明らかに拗ねているようだった。賢は前のドアを閉めると、次に後ろのドアを開けた。亜希子が嬉しそうな目つきで賢の眼を見た。賢は会釈を返して亜希子の手を取った。亜希子は賢の手を握りしめてそのまま車に乗った。賢は後部座席のドアを閉めて運転席にまわった。祐子の嫉妬をひしひしと感じた。

「今日はこれから鳥取砂丘に行って、その後天橋立で元伊勢神社を参拝してから帰途に着こう」

亜希子が

「はい」

と明るく応えた。祐子はただ、頷いただけだった。

午後八時三十五分飛行機は羽田空港に着いた。亜希子の母親が迎えに来ていた。亜希子は賢と祐子を母親に紹介した。亜希子の母親は落ち着いた感じの50歳台半ばの女性だった。

「娘が大変お世話になりました。少しお茶でもいかがですか？」

と言ったが、時間が遅いからということで賢は辞退した。祐子も合槌を打った。亜希子と母親は暫くその場に留まっていた。賢と祐子はそこで亜希子と分かれた。祐子は亜希子の姿が見えなくなってから暫くして賢に言った。

「賢くん、わたし今朝からずっと気分が悪かったわ」

「今はもう大丈夫か？」

祐子はそれ以上言わなかった。ふたりはモノレールのチケットを買った。駅が混んでいたので1回やり過ごし、乗車待ちの列の先頭に並んだ。モノレールに乗ると2人掛けの席を確保し、スーツケースを荷物置き場に置いた。賢は祐子を窓際に座らせて自分は通路側に座った。祐子が賢の手を握った。賢は祐子の眼を見た。祐子はやっと寛いだ感じだった。ふたりが祐子のアパートの前に着いた時は既に10時を回っていた。

「賢くん、寄って行って」

賢は祐子の眼を見た。今朝の鋭い眼光はなくなり、いつもの穏やかな、しかし、輝いた瞳がそこにあった。賢は頷いた。祐子が扉を開くと発ち込めた熱気が襲ってきた。賢が部屋に入ってしまうと祐子は部屋の鍵を掛けた。賢は荷物を部屋の隅に置いた。賢が振り向くと同時に祐子が賢の胸に飛び込んで来た。

ふたりが目を覚ましたのは翌朝の8時を廻った頃だった。ふたりは一糸まとわず朝まで一つになっていた。

祐子は目を覚ますと賢に口づけをした。そして、すっと起きあがってバスルームに行き、シャワーを浴びてから躰と頭にタオルを巻き付けて戻って来た。

「眼、醒めた？」

賢はまだまどろみの中にいた。冷えた両腕を組んで、2、3度腕の筋肉を揉みほぐした。クーラーの温度が低過ぎたのかも知れなかった。祐子

はクローゼットを開き衣類を身に着けた。エプロン姿でキッチンに立ち、朝食を準備し始めた。賢もやおら起き上りバスルームに向かった。シャワーの水は心地よかった。浴室から戻ると、賢はスーツケースの中から亜希子が洗ってくれたシャツと下着を取り出して身に着け、祐子へのみやげを取り出した。キッチンで料理を作っている祐子にそっと近付くと、背後から抱きしめた。祐子は身をくねらせて賢の方に向き直った。賢は出雲の土産店で買った髪飾りを祐子の髪に挿した。祐子は両手でそっと触れてみて、直ぐに洗面所に駆けて行った。鏡の前で暫く頭をくねらせて居てから、急いで戻って来て何も言わず賢に抱き付いた。

「今日、新宿のV E A S館に行ってみようか？」

「うん」

祐子の瞳が潤んでいた。祐子は朝食を済ますと、直ぐに洗濯をした。賢の衣類もすべて洗い、バスルームのポールに吊してあるハンガーに掛けた。祐子は新妻を演じ切っていた。

「あなた、わたしたち一緒に住んだ方がいいんじゃないかしら」

「祐子、俺たちは精神面ではいつも一つであるのが望ましいと思う。だけど生活を共にすると、意識が生活に引き摺られてしまう。だからこのままの方がいいと思うよ」

「でもわたし、あなたが近くにいないと安心できないもの」

「それは、今はそうだろう。俺も同じだ。だけど、直ぐにお互いが空気のような存在になってしまうよ。空気がものすごく大切なのに俺たちは空気を意識していない。いや、意識できなくなっている」

「だけど、いつも一緒にいたいんだもん」

「いつも一緒にいるじゃないか。生活の場は別々だけどな」

祐子は食い下がったが、賢は合意しなかった。ふたりがV E A S館に入ったのは10時過ぎだった。新宿にあるV E A Sスタジオでは仮想動物体験、仮想昆虫体験、仮想植物体験、仮想岩石体験、仮想水体験の5種類の体験ができた。オープンしてから既に1年が経過していた。島根と同じように、当初は連日大勢の入場者で賑わった、しかし8月の夏休み期間にも拘わらず、この日はほとんど待ち時間無く入館することができ

た。それは、入場者が23歳以上に限定されているためだと祐子は思った。このVEAS館にも入場前に簡単な健康チェックが必要だった。ふたりは問題なく健康チェックをパスした。チケット販売所で賢が祐子に聞いた。

「どの体験をしたい？」

「本当はわたしも花の体験をしたいんだけど、あなた、もう体験してしまったでしょ。だから水の体験をしてみるわ」

「そう、面白そうじゃないか。俺も一緒に体験してみるよ」

賢は水のチケットを2枚買い、祐子と一緒に中に入った。仮想の水体験には20種類のパターンがあった。ふたりはペア体験の中から、川と海という体験を選んだ。エントランスを入ると三つの分岐があり、係の若い女性が分岐の説明をしていた。壁にはその女性の話している内容を図入りで説明している案内板があった。賢は島根と同じ方式だと思った。ふたりは係の女性の説明に耳を傾けた。

「ようこそVEAS館にいらっしゃいました。ここからは水の仮想体験を味わって頂きます。このコースは大きく三つに分かれています。先ず初めのコースは原子、分子というミクロな世界で、水を体験して頂きます。二番目のコースは水滴のコースです。水が蒸発し、雨となって落ちて来て、それがいろいろな処に浸透して行くところを体験して頂きます。三番目のコースは流れのコースです。湧水が川になり、ついには海に溶け込む過程を経験して頂きます。VEASが初めてのお客様はこの三番目のコースをお勧め致します。それではコースをお選び頂き中に進んでください」

「祐子は初めてだから三番目のコースにするか？」

「うん。それが一番楽しそう」

賢は祐子がアニメーションの意味を間違えているのではないかと思った。ふたりは川から海と書いてある入り口に入った。少し進むとペアボックスシートに近付いた。このシートも島根と同じ方式だったが、それぞれのシートが7色に色分けされていて、男性用と女性用に分かれていた。祐子と賢はブルーのシートに隣り合って座った。座席の前のスクリ

ーンは九十インチサイズで、その下は幅十五センチ程度の台になっていた。その台の上にヘッドフォン二個と三次元グラスと書いてある箱の中にプラスチック製の眼鏡が二つ置いてある。台の中央に直径5センチほどもある緑色のスタートボタンと、赤色のストップボタンが設けられており、その下に簡単な説明書きが貼り付けてあった。この辺りの作りは島根と同じだった。一つ違っていたのは、座席にはシートベルトが付いていてそれを締めることが義務付けられていることだった。説明書には5種類の川の流れを写した写真と番号が書かれていた。説明書の横には0から9までのボタンが付いたキーボックスが設けられていて、数字ボタンを押すとそのコースの体験が始まるようになっていた。賢と祐子はヘッドフォンとグラスを一つずつ取って身に着け、シートベルトを締めた。祐子は賢の耳元に口を近づけて、3番目の川の写真を指差し

「最上川がいいわ」

と言った。賢が3のスイッチを押してからスタートボタンを押すと、ヘッドフォンからザーッと雨が激しく水面を打つような音がしてきて、暫くその音が続いた。やがて女性の静かで美しい声の説明が始まった。

「ようこそ水の世界にお越しくございました。これから暫く、男性であるあなたは水の流れになって頂き、あなたのお連れの方は海になって頂きます。自分の意識を集中して水になり切ってください。ここからは賢と祐子のヘッドフォンには別々の説明が流れた。賢はヘッドフォンの位置を少し押し上げた。あなたは自分の軀を作っている雨や湧水を自分の中に受け入れて、次第に成長しながら岩や土地の形に応じて姿形を変えながら流れてゆきます。途中であなたの一部分はあなたから離れて地に浸み込んでゆきます。暫く岩の間を流れると大きな滝になります。高い崖から滝壺に向かって一気に落ちます。あなたは滝壺深く潜り込みそして渦を作って流れ出します。いろいろな生き物に出会います。沢蟹たちや魚たちです。あなたはそれらの周りを取り囲みその中に浸透し、それを自分に同化させながら流れ続けます。次第に川幅は広がりあなたの動きは緩やかになります。あなたは人間達と出会います。人間達の作った構造物に出会います。あなたの一部は浄化施設に流れ入り蒸留されてポ

ンプにより送り出され、家庭や工場に送られます。あなたの一部は水道を通り、家庭の蛇口から一気に吹き出ます。そして、鍋に受けられ、熱せられ、一部は蒸発し、残った部分は食べ物の中に浸み込みます。あなたは人間の身体の中を通過して、一部は身体の中に残り、軀を巡ります。やがてあなたは排泄され、それが集められます。また、川から浄化施設を経たあなたの一部はそこでいろいろな汚物や液体と混ざり合います。そして下水道を通過して、再び元の川の川下に戻って来ます。そこであなたは汚れた自分を禳ぎます。あなたは川から出て、あらゆるところに入り込み、そして流れ出て、やがて元の川に戻ります。河口に至ると、あなたは海に出会います。海は大きく広々としていて、あなたにはその存在が無限大に感じられます。海はあなたの持っていない塩という要素に染まっています。大きく身体を広げあなたを受け入れてくれます。そしていつかあなたはその海と一つになり幸福感に満たされます。さあ、もう一度、自分が水であることを強く意識してください。これからあなたが大海に溶け込むまでの間、心を空しくしてください。・・・」

説明が終わると九十インチ画面の中央に仕切り版が降りて来てスクリーンの右半分に激しい雨の映像が映し出された。賢は自分が雨水であることを受け入れた。雨水は地面を激しく打ち、次第に一つに合わさって流れ始めた。ヘッドフォンから雨の落ちる音に水の流れる音が混ざり、次第に激しい流れになっていった。軀が流れに合わせて左右に小刻みに揺れるのが分かった。やがてスクリーンは岩や小石を映し出した。その岩や小石、土の映像が次から次にめまぐるしく移り変わってゆく。賢は初め、まるで川下りをしているような感じがしたが、やがて自分が流れになっている感覚を覚え始めた。岩にぶつかり、方向を変え、岩の上に飛び乗り、そこに少し自分の陰を残してまた流れに戻り、小石の間を進み、地に潜って、また川の流れに戻る。その動きが軀にも伝わって来た。暫くは激しい流れを演じていた。やがて、岩盤に出会うと速度が緩く、浅くなって、さらさらと音を立てるようになってきた。それが暫く続いたと思ったら、一気に下に落ち始めた。自分の軀が前向きに傾き、落ちてゆく感覚が分かる。激しい勢いで大きな淀みの中に突き刺さると、深

く進行して淀みと融合し、渦を作って上に上昇した。そして、また元の流れを作り出した。暫くの間、落ちる前と同じようなリズムカルな流れを感じていた。自分の中に動物たちや植物たちが息づいているのを感じた。自分もその動物や植物の一部であることを感じた。その動物や植物を息づかせ、自分も激しさに踊っているような感覚がしたが、次第にそれも無くなってきて、自然に穏やかな清清しさに変わってきた。自分が空を映しているのが分かった。それからまた、地に潜り込んで行き、地と一体となっているのが感じられてきた。様々な流れが自分に向かって来て、自分の中に入って来て、そして出て行った。いろいろな世界が目前に展開され、自分がそれらの世界に広がり、浸透してゆくのが分かった。自分が一つの個体でないという意識が感じられた。あらゆるものに浸透してゆく自分が感じられた。そしてまた、それらの中から自分が滲み出して来て、もともと自分のいた川の流れの中に戻った。それから穏やかな流れを作っている自分が感じられた。やがて、先の方に大きな広がりが見え、入り口を開いて自分を迎えているのが分かった。大きな広がりとは異質であるように思えたが、その異質さは見掛けだけで本質が一つであることが分かってきた。海だった。知らないうちに仕切り版が上がり、九十インチスクリーンに一面に広大な海が映し出された。何処までも広く、深く、穏やかで、自分を抱き込んでくれるのが分かった。自分は次第に海と一体になり同化した。もう自分は海であった。これまで通り過ぎて来た様々な記憶が自分の中に残っていると同時に、更に海が感じているあらゆる感覚が伝わってきた。それは無限に広がる幸福感であった。やがて映像はズームアウトし、地球全体が映し出された。

祐子は仕切り版が降りて来ると直ぐに、水面が波を立てているのを感じた。波の動きに伴って自分が揺れているのを感じた。祐子はボートに乗っているような感覚を覚えた。やがてそのボートのような動きは止まり、強い日差しが上から照り付けてくるのを感じた。しかし、自分の座っている下の方は冷たい感じがした。やがて、スクリーンは海の中を映像として映し出していった。祐子は自分が海の水であることを自分自身に言

い聞かせた。遠くから泳いで来た魚が次第に迫って来て、大きな口を開け、自分がその口の中に入ってゆく映像になった。次第に魚の軀の一部に入り込んでゆく映像が映し出され、様々な幾何学構造の中を巡ると、また魚の口からはき出されるのを感じた。それは大きさと色、形の異なった魚で三回繰り返された。やがて、海の深い場所に潜ってゆく映像が映し出された。深い海の底は暗く、冷たかった。実際自分の軀が冷たさを感じた。やがて映像は原色の魚や珊瑚、海草が作り出す天国のような世界を映し出した。それは広々と広がり、様々な美しい世界が展開された。画面は変わり、激しい風が吹き付けて来た。自分が波となって岩肌に打ち付けて、砕ける様子が見えた。岩にぶつかる時、激しい衝撃が起き軀が激しく揺れた。それは岩をも砕く大きな波だった。岸には沢山の生物がいた。波を被っている生物もいた。波を避けて磯に遊ぶ生物もいた。波となった水がそれらの生物にぶつかり浸透してゆくのが分かった。自分の上に1艘の船が通り過ぎるのを感じた。やがて画面はズームアウトし、魚たちや海草が小さくなっていった。映像は海中から無限の広がりを持つ海を映し出した。その広がり、あらゆるものを包み込むように包含していた。いくつかの川が流れ込んで来ていた。その川の一つの河口に焦点が移った。ゆったりとした流れが海との境目で溶け込んできた。その流れを自分の中に受け入れた。受け入れたとき、その流れと融合する感覚がした。そして映像は次第にズームアウトし、同時に仕切り版が上がり、九十インチスクリーン全体に無限に広がるような大洋を映し出した。更に、ズームアウトが続き、最後に地球を写し出した。そこで映像は終わった。賢は立ち上がり、祐子の方を振り向いた。

「どうだった？」

「海は美しかったわ。とてもスケールが大きくて、すべてを包含しているのが分かったわ。でも、わたしには大き過ぎたかも知れない。とても海になりきることはできなかったわ」

ふたりはV E A S館を出た。正午を少し過ぎていた。ふたりは新宿の繁華街を歩きながら話した。V E A S館から出たときの熱気に、祐子の襟首には汗が玉になって浮き出ている。賢は額の汗をハンカチで拭いなが

ら言った。

「すこしスケールが大き過ぎたかな。でも水を感じる事ができたよな。俺は、すべてに浸透してゆく水が、あらゆるものと一体になってゆくのを感じたよ」

「うん。すべてを受け入れる海の水は、すべてを溶かしてしまうように感じたわ」

「すべてを溶かすとはうまいことを言ったな。祐子、昼飯は何にしようか？」

「あなたの好きなものでいいわよ」

「そうだな、暑いからウナギでも食べるか？」

「たまにはいいわね」

ふたりは新宿の歌舞伎町にある鰻屋に入った。中は冷房が効いていて、激しい温度差にいきなり汗が引いてゆくを感じた。店の中には蒲焼きの香ばしい匂が立ち込めている。ふたりはカウンター席に座った。賢はビールを頼んだ。冷たい瓶ビールが賢の前に出され、グラスがふたりの前に一つずつ出された。祐子が手を伸ばしてさっとビール瓶を取った。

「さあどうぞ」

ふたりは「乾杯！」と言ってグラスを合わせた。賢は一つの旅が終わり、消滅事件のある形が見えてきたように感じていた。それはこれまでの人生で自分を型に嵌めていた社会規範や物質的な世界観からは理解できない現象のようである。長い歴史の中で大勢の神秘家達が体験し、それを言い表してきた内容と同じものであるように感じた。しかし、その神秘家達が語った内容はあまりに抽象的だったし、この消滅現象にしても科学的なものの考え方をする人間に対しては、とても理論立てて説明することができないと思った。

「あなた、何を考えているの？」

祐子はビール瓶を取り、まだ1 / 3ほど残っている賢のグラスにビールを注ぎ足した。

「祐子、俺は、人間という存在は、本当はいつでもこの物質現象世界から精神的な意識の世界に移行できる能力を与えられているような気が

するんだ。最近いろいろ不可解な事件が起きているのは、その潜在的な能力が普遍的に開示される時期が来ていることを示しているような気がするんだ。この間も言ったと思うけど、DNAの特定情報のスイッチがONに切り替えられる環境が出来上がるんじゃないかと思うんだ。いや、もしかしたら既にその環境は出来ていて、何かのきっかけで自動的に切り替わるのかも知れない。そうなると、もうこの本質から投影されている物質の世界は脳に投影されるのと同じように意識の世界にも投影されて、しかもその投影される部分に意志を働かせることができるようになって、意志の力でこの世界をどうにでも変化させることができるようになるんじゃないかなんて思うんだ」

「あなたの言う通りかもしれないわ。一つのきっかけがあれば世界は自分の思う方向に動かせる訳ね。だけど大勢の人が居て、みんなが違う方向に意志を働かせたらまとまらないんじゃない？」

「その通りだと思う。だからもし変化できる時期になっていたとしても、俺たちの大半が同じ方向に意志を働かせることができなければどうにもならないと思う。自分の意識の創り出す場が変化を起こそうとする場の全体にまで及び、自分以外の人の意識も同じ意識になって、同じようにその変化させようとしている場全体にまで及ばなくては、意図した通りの変化は起きないと思う。共通意識の世界はそう簡単には実現できないだろうな。権力者が覇権で世界を統一しても、その世界に属する大半の人たちが同じ方向に意識を働かせなくては何も成し遂げられないんだから。元々我々は自分を育てている世界について何一つ知らない。ひもといたと思っていることは単なる現象の説明に過ぎない。それはそうだと思う。この世界は自分自身であって、自分がこの世界を創っているのだから、現象を追ってもその元になっている本質は分からない。自分の内部にその原因があるんだと思う。それは、この三次元世界の分離された構造からは推察することがとても難しいことだと思うんだ。皆が内側に向くようにならなくてはだめだ。もしかすると、それもRNAが機能し始めてDNAの情報が有効になることで切り替わるのかも知れないけどな」

「あの消滅事件とどう関係するのかな」

祐子は賢の話す言葉は分かったように思ったが、賢がこれからやろうとしていることをよく理解できないでいる。

「今度の旅行で江川さんの消滅を追ってみて少し分かったことは、この消滅現象には三つの側面があるということだ。一つは消滅させる力が作用したということ、もう一つはその力を受けて実際に消滅したということ。そして、その消滅状態から元に戻っていないということ。この現象を解明する鍵は、あの海の老人と亜希子さんにあるような気がする」
祐子は亜希子の名前を聞くと、今朝のことが思い出されもやもやとした感情が湧き起こってきた。祐子は賢を見つめていた視線をビールのグラスに移し半分ほど残っていたビールを一気に飲み干した。賢は祐子のグラスにビールを注いだ。

「祐子は居なかったけど、海の老人は俺と亜希子さんに「現実的には俺たちは異なった次元に入っているんだけど、そのことに気付いていない。この世界は、実際は実在的部分と虚存在的部分で成り立っている。この虚の部分が現在の科学では解ってない」と言ったんだ」

祐子は自分の不在の時に賢が亜希子といろいろな経験をしていたことに対して焦りの感情が込み上げてきた。賢の話している内容自体は祐子にとってはそれほど重要なことではなかった。

「わたしにはよく分からないわ。・・・ねえあなた、今朝も言ったけど、わたしたち一緒に住んだ方がよくないかしら。あなたはずっと旅行しているから、自分のアパートに戻ることもほとんどない訳でしょ。勿体ないわ。それに旅行から戻って来ても、あなたのアパートにいる時間よりわたしと一緒にいる時間の方がずっと長いでしょ。あなたのアパートの経費が無駄だと思うのよ」

賢は話の腰を折られたと思ったが、祐子の話に同調した。

「確かにそう言われればそうだな。会社も辞めたことだし、できるだけ無駄を省いた方がいいかもしれないな。だけど一番大切なことは経費じゃないぞ。生活に埋没しないでいかに意識的に生きられるかということだ」

「そうね。でもよく考えてみて・・・アパートの契約はどうなっているの？」

「二年契約で、この九月が更新月になっているよ。もうそろそろ連絡が来る頃だと思うけどな。実は、俺はこの九月で一応契約を打ち切ろうと考えていることはいるんだが・・・」

「それじゃ丁度いいじゃないの。ねっ、そうしようよ」

「さっきも言ったけど、俺たち、夫婦のようになってしまうぞ。それじゃだめだと思うんだ。・・・じゃあ、こうしようか。俺はどこか仮の住所に住民登録を変更して、おまえのアパートにも厄介になる。その代わりにおまえの部屋に泊まった日数に換算した部屋代を払う。しかし、あくまで俺の住所はどこか別の仮の住所にする」

「それならそれでもいいわ。だけど、一緒に住んだ方がいいと思うんだけど・・・」

祐子は亜希子のことを意識していた。賢が自分と同棲していると知れば、賢に近付かなくなると思ったのである。賢はそんなことには構わず、一番動きやすい形にしたかった。祐子はしぶしぶ納得した。ウェイターが鰻重と茶を持って来た。確かに暑い日の鰻は格別だった。

「今日はわたしの驕りよ」

と祐子が言った。賢は「いや」と言いかけたが、直ぐ

「それじゃ驕ってもらおうとするか。祐子、ありがとう」

と言って受け入れた。鰻重を食べ終わると、ふたりは茶を啜って店を出た。賢が資料の整理をしたいと言った。祐子は頷いた。ふたりは一旦祐子のアパートに戻り、賢は荷物を持って自分のアパートに帰った。祐子には「今夜はお互いに自分のアパートにしよう」と言った。祐子は初めいやだと言ったが、賢が真剣な面持ちで「整理の時間が欲しい」と言ったので止む無く承知した。アパートの部屋は暫く留守にしていたため、蒸し風呂のような暑さと雑巾の蒸れたような悪臭が漂っていて、胸が悪くなるような気がした。賢は急いで窓を開け広げた。洗面所で顔を洗うとスーツケースから汚れ物を引っ張り出し、洗濯機に放り込んだ。そして二冊のノートと数馬と亮子へのみやげ、二冊の民話集を取り出した。

あとは旅行常備品なので、スーツケースの中にそのまま残した。賢は食卓の椅子に腰掛けノートのまとめを始めた。8割方まとめ終わると、一休みしようと思いベッドに横になった。ふと気が付くともう日はすっかり沈んでいて、心地よい風が窓から吹き込んで来ていた。部屋の壁は外の灯りに照らされた窓枠のシルエットを映し出していた。眼を凝らして時計を見ると9時を過ぎていた。少し空腹感を覚えた。賢は起き上がると、洗面所に行って蛇口から直接水を飲んだ。数日間島根の水を飲んでいたので、再び口にした東京の水の味に幻滅感を覚えた。その時ドアをノックする音がした。賢はやはり祐子が来たかと思った。灯りを付けて扉を開けると亜希子が立っていた。亜希子は薄い黄色の楓模様の入った水色のブラウスにグリーンのスカートを履いていて、手には大きなビニールバッグと大きめのトラベルバッグを持っている。

「こんばんは」

亜希子が微笑んでいる。

「亜希子さん、こんな時間にどうしたんだ」

「わたくし、今晚ここに泊めていただけないかしら？」

賢は驚いた。亜希子に何か問題が起きたのだと感じた。

「兎に角上がって、話はそれから聞くよ」

亜希子が部屋に入ると、賢はダイニングテーブルの椅子に腰掛けるように亜希子を促した。冷蔵庫から茶のペットボトルを取り出し、亜希子の前にグラスを置いてペットボトルの茶を注いだ。

「どうしたんだ」

「わたくし、旅行から戻った翌日母と共に華道の先生をご自宅にお見舞いしました。先生は大分具合が良くなっていらっしやって、わたくしたちが伺った時はもう元気に生活できるまで回復されていました。わたくしたちはそこで、華道の最近の動向や実際の花の入手方法など、世間話を交えて一時間ほどお話しをしていたのですが、その中で先生がわたくしのお見合いの話をされたのです。相手の方は開業医の息子さんで、28歳の方でした。まだ、研修医でいらっしやるとのことでした。わたくしは直ぐにお断りしましたが、先生のご自宅を失礼してから車の中で母

に酷く叱られました。折角先生がご用意されたのに無碍にお断りして申し訳ないと言うのです。わたくしはこれまで、母と争ったことはありませんでしたが、流石にこの時ばかりは、全くその気がないのに曖昧なお返事を申し上げるのは先生に対して失礼に当たると言いました。母は納得しませんでした。家に帰って分かったのですが、何でも父の知り合いの方の息子さんらしく、父がわたくしに直接話すのに躊躇して間接的に先生にお願いしたようなのです。わたくしは既に生き方を決めておりますから父にも結婚する意思の無いことを伝えました。両親は全く見合いを受け付けないわたくしの態度を怪訝に感じたようです。それで何か可笑しいということになって、今度の旅行のことを問い詰められました。わたくしは正直に話しました。両親はわたくしを叱りました。いつまでも子供のようなことをしてはだめだと言いました。わたくしは友達の家に行くと言って飛び出して来たのです。生まれて初めて家出というものをしてしまいました。両親はわたくしを愛してくれていますから、わたくしは明日には戻るつもりです。大学の時の友達もおりますがそんなに深くお付き合いをしていませんし、こんなに夜遅く伺えません。賢さんなら受け止めていただけたらと思うて、こうしてお邪魔してしまいました」

それだけ話すと、亜希子は少ししょげたように伏し目がちになり、今にも泣き出しそうな顔をした。まるで悪戯をして叱られた子供のような顔だった。

「亜希子さん、分かった。しかし、ここは男の部屋だ。こんなことをご両親が知ったら・・・亜希子さん、ご両親を悲しませちゃだめだ。一番近くにいる人に苦しみを与えるようじゃ、とても他の人を助けることなんてできないぞ」

亜希子は黙って頷いた。亜希子は持って来たビニール袋を取り上げ、そのまま賢に差し出しながら言った

「本当は、賢さんの処に来たかったのです。お借りした賢さんのシャツと、パンツを畳んでいるうちに、お会いしたくなつたんです。勿論両親にも叱られて、身の置き場がなかったのですが・・・」

賢はビニール袋を受け取って中を覗いた。シャツとパンツが綺麗に畳んで入れてある。微かな石鹸の香りがした。

「ありがとう」

「いいえ、お礼を申し上げるのはわたくしの方です。この旅行、とても楽しかったです。今までした旅行の中で一番楽しかった・・・」

亜希子は賢の顔を見つめた。

「兎に角、亜希子さん、今日のところはまずご両親に電話して謝りなさい。それから家に帰りなさい」

亜希子は頷いて、家にスマートフォンを掛けた。賢は話の内容から、亜希子の両親がそれほど怒っていないことを感じ取った。賢は亜希子を連れて外に出た。亜希子を家まで送って行くつもりだった。アパートの階段を降りて亜希子の手を引いて歩いていると、通りを曲がったところで祐子と出くわした。亜希子は咄嗟に

「こんばんは」

と挨拶した。

「あら、賢くんと亜希子さん、こんな夜遅くにご一緒で？」

祐子は気分を害している様子を露骨に顕した。

「祐子、今から亜希子さんを駅まで送って行くところだ」

「わたくしも一寸用事があるところよ。丁度駅の方角だから一緒に行くわ」

祐子は挑戦的だった。祐子は当然賢のアパートに来る途中のはずだった。

三人は賢を中心にして並んで歩いた。賢は亜希子に

「一人で帰れるか？家まで送って行こうか？」

と聞いた。亜希子は

「大丈夫です」

と応えた。祐子は頭全体がカーッと熱くなるのを感じた。自分でも明らかに亜希子に対して嫉妬していることが分かった。賢と亜希子の間に何が起きたのか、何故今亜希子がここにいるのか疑問に思った。それを口に出して言おうかどうしようか逡巡した末、思い切って切り出した。

「亜希子さん、一体どうしたの？」

「はい、賢さんからお借りしたシャツとズボンをお返しに来ました」
祐子は「こんな夜に、おかしいじゃないの」と思った。しかし、それは口にしなかった。賢と祐子は亜希子を地下鉄の改札口まで送り、亜希子が切符を買ってふたりに頭を下げ、改札口を通り階段を降りて姿が見えなくなるまで見送った。賢はアパートに帰った。途中、祐子が

「亜希子さん、どうしたの？」

と聞いた。

「彼女、俺に衣類を返しに来たんだけど、どうもお見合いを迫られて、ご両親と喧嘩したようだったな」

「まだ、そんな年齢じゃないのに」

「何でも、お父さんの知り合いの息子さんとか。それを、彼女素っ気なく断ったみたいだ。それで叱られたらしい」

「そうだったの。それで、賢くん相談に来た訳？」

「うん。衣類を返しがてらな」

賢は亜希子が家出したと言っていたことは口にしなかった。アパートの部屋に入ると賢は床の上の旅行用バッグに気付いた。亜希子が忘れて行ったものだった。賢はそのバッグをベッドの脇に置いた。祐子はそれが賢のものと思ったようだった。

「祐子、本当は俺のところに来たんじゃないか？」

祐子は微笑んだ。

「でも、今日は帰るわ」

祐子は先ほどまでの苛ついた気持ちを拭い去りたいような気持ちになっていた。

「今日は帰る。あなた、次の旅行はいつ出掛けるの？」

「うん、明日具体的なスケジュールを立てるけど、多分明後日には出発するつもりだ。今度は岩手に行って来ようと思う」

「岩手って、あのスーパーで働いていた人がいなくなったって事件？」

「うん、スーパーの中で一度消えて、その翌日また車と共に消えた野岸孝子という人のことを調べてみようと思ってね」

祐子は賢に近づき、軽く口づけして部屋を出た。

遠野1

賢は東北新幹線を新花巻駅で降りた。花巻にいる間は近くのビジネスホテルに宿泊することに決めていた。夏の暑い日差しの中では、舗装道路の照り返しがきつい。「日本の駅も綺麗になったものだ」と思いながらレンタカーの事務所を探した。改札を出ると左手に受付カウンターがあった。賢は小型車を借りた。荷物をトランクに入れると、いつも使う小バッグと東京駅で買った雷おこしが2箱入った紙袋を助手席に置き、遠野に向けて出発した。駅から出て直ぐに283号線に入った。左手前方に山々が連なっている。奥深そうな山系に向かって走って行くと東和町を抜ける辺りで、左手に一寸大き目の山が現われてきた。賢はもしかしたら有名な早池峰山ではないかと思った。事前に野岸孝子の働いていたスーパーマーケットと彼女の家住所を調べてある。先ず野岸孝子の家に行ってみることに決めた。住所は祐子に調べてもらって、遠野市上郷町来内だということまでは分かっている。東和町を過ぎた辺りから左手は山肌が迫り右側が溪流のような美しい川に沿った道になった。やがて正面に一つだけ目立った先の尖った山が見えた。これが遠野物語に出てくる六角牛山（ろっこうしやま）なのかと思った。やっと遠野に入ったようだ。途中車を止め、通り掛かりの中年の主婦に道を尋ねた。失踪事件の話をするとうちに分かった。家は田園風景の広がる山裾にあった。家の手前にある空き地に車を停めて降り、そこからは幅二メートルほどの畔道を二十メートルほど行くと、家の玄関の前に出た。どうやらそこが野岸孝子の家のような感じだ。裏には広い敷地があり、小型バイクが1台停めてある。辺りには車の轍の跡が残っている。野岸孝子はここに車を留めていたのだろう。裏から来れば直接車を乗り付けることができたようだ。家は平屋で、五メートルほどもある縁側が玄関の横に続いている。以前は農家だったとすぐ分かる家だった。玄関は開いていた。中には人の居る気配も感じられた。

「ごめんください」

賢は玄関口から呼び掛けてみた。返事は無かった。もう一度呼び掛けてみたが、やはり返事は無い。賢は裏に廻った。畑と山肌の間にある細い畝を二人の男の子が虫取り網と虫籠を手にして歩いて来るのが見えた。背の高さは違うが二人の子供の顔はよく似ている。浅黒い丸顔で眼が細く、鼻が低めの子供だった。小さい方が背の高い方に向かって、

「あまり捕れなかったな」

と言った。大きい方の子供は

「あしたまた挑戦だ」

と言いながら、虫籠を覗いて見ている。

「兄ちゃん、また行くのか？」

「うん、あしたの朝早く行くぞ」

賢はふたりが家の裏に近付いた時に声を掛けた。

「こんにちは」

子供達は元気に応えた。

「こんにちは、おじさん、何か用？」

賢の持っている雷おこしの袋をじろじろ見ながら大きい方の子供が言った。

「うん、一寸聞きたいことがあってね。君たちはこの家の子？」

年上の方が応えた。

「うん、そうだよ。だけど、夕方になんないと姉ちゃん帰って来ないよ」

「君たちは小学生かい？」

「そうだよ。おれは遠野小の四年生、信次は二年生だよ」

「君たちのお母さん、いなくなったんだろう。いついなくなったのかな」

「1年前だよ。今は姉ちゃんと三人で住んでるんだ。小父さん、どこから来たの？」

「東京からだよ」

ふたりの子供は人なつっこく近付いて来て、よく喋った。

「お父さんは？」

賢は少し躊躇したが思い切って聞いてみた。

「父ちゃんは、大阪に行ってるんだ。今度のお正月にはきっと帰って来

るよ」

「今年は帰って来たの？」

弟の方が少し暗い顔になったが、兄は明るい顔で応えた。

「いいや、今年はきっと忙しくて帰って来れなかったんだよ」

賢は紙袋を兄に差し出した。

「これ、東京の雷おこしだよ。あとで食べな」

「小父さん、ありがとう。今日はこれからどこかに行くの？」

「いいや、今日は君の家で話を聞くのが目的だから、他には行かないよ」

「それじゃ、家に上がんなよ。母ちゃんがいなくなる前の日に、変なものを持って来たんだ。それを見せてやるからさ」

「太郎兄ちゃん、おれ、あんたなものきれえだ」

信次は眉間に皺を寄せて言った。

「お姉さんのいない時に、よその小父さんを家に上げて叱られないか？」

「へいちゃらさ。隣の小父さんだって、石上の小母さんだって、どんどん上がって来るよ。それに冬には怖い怖いなまはげも、な、信次」

兄は弟の顔を見た。

「太郎兄ちゃん。おれ、そんなこと言ったって怖くねえぞ。一度も来たことねえぞ」

「そうだ、縁側の窓を開けてくれないか。小父さんはそこに腰掛けて話を聞くよ」

「うん、わかった。一寸待っててね」

太郎が家に入って行った。信次も後を追った。ふたりは縁側の窓を一杯に開け広げて、座布団を1枚持って来た。

「小父さん、ここ座っていいよ」

「ありがとう」

「俺、さっき言ったやつを一寸持って来るから」

縁側からは中が見渡せたが、二間（ふたま）が続いていて、手前の部屋の真ん中に長座卓が置いてある。太郎は躰を斜めにしてそれを避けるようにしながら奥に駆けて行った。信次も真似をして後を追った。太郎が淡い青色をした直径二十センチほどの玉を持って来た。見た目は柔らか

そうで、青い色を内側に秘めているような神秘的な感じがする玉だ。指で触れてみると意外に堅いものだった。丁度うらなりの西瓜を想わせる大きさだったが、重さは西瓜よりずっと軽かった。

「母ちゃんが、店からこれを持って帰って来たんだ。よその小父さんにもらったって言ってたけど、俺っちのおもちゃにしていって言ってた」
信次が少し離れながら真剣な顔つきをして言った。

「こいつおっかねえぞ。時々おおきくなったり、小さくなったりするんだじゃ。いつもは変わんねえが、姉ちゃんや太郎兄ちゃんが怒るとこいつも怒るんだじゃ」

「そんなことねえぞ。信次はこわがりだからそんなふうに見えるんだ」
「太郎兄ちゃん。おら知ってるだじゃ。こいつは生きてるみてえだべ」
賢は玉を手にしてみたが特に変わったところは見当たらなかった。ただ、その玉をじっと見ていると、意識がすーっと吸い込まれてゆくような気がしてきた。その感じは丁度、亜希子の目を見つめたときに時々経験した感覚に似ていた。

「お母さんは、これどこの小父さんからもらったって言ってた？」

「父ちゃんに似た小父さんだって言ってたよ。母ちゃん、スーパーの駐車場に行こうとして歩いている時、その小父さんにぶつかったんだって。母ちゃん、どうかしてたって言ってた。そのとき持ってた袋を落としちゃって、いろんなものが地面に散らばったんだって。そしたらその小父さんが、散らばったものを拾ってくれて、「ごめんなさい」って言って、「この玉をお子さんに」ってくれたんだって・・・お子さんって俺っちのことだよ・・・母ちゃんはその小父さんの顔を見たら父ちゃんにそっくりだったんだって。母ちゃんぼーっとしてしまったって言ってた。この玉、俺っちの宝ものだからおくないさまの下のひらきにしまってるんだ。時々出して遊ぶんだ。信次は怖がってるけどな」

太郎はそう言いながら、からかうように信次の方を見た。

「警察の小父さんに見せなかったのかね？」

「見せたよ。おれっちの宝物だから、持ってっちゃだめだって言ったんだけど、何とか品（ひん）とか言って、姉ちゃんと話をして持ってっち

やった。だけど後で返してよこしたよ」

「いつも、これで遊ぶのかね？」

「いや、時々だよ。いつもはおくないさまのひらきに入れとくんだ。だけどこいつは不思議な奴で、時々なくなっちゃうんだ。このあいだも、川に持って行ってこいつを水に浮かべて、こいつが岩の間を流れるのを見てたんだけど、岩陰で見えなくなっちゃったんだ。いくら探しても分からなくて、もう夕方になってたから、諦めて明日また探そうって信次に言って家に帰って来たら、こいついつの間にかおくないさまのひらきの中に戻っていたんだ。不思議なこともあるもんだ。おかしいと思って、押し入れの浮き輪のあるところにしまっておいたビーチボールを確かめたら、なくなっていたんだ。だけど、おれっちはあの玉で遊んだんだ。ビーチボールなんて持ってなかった。間違えねえ。なあ、信次」

「うん、おれもあそんだ。んだども、おれこの玉さきれえだ。こええ」賢は子供達とこの近くの自然についていろいろ話をした。かれこれ2時間ほど経って6時を少し過ぎた頃、姉のゆきが帰って来た。ゆきは紺の地に白字でT r e a s u r eとプリントしてあるTシャツに、ジーパンとスニーカーという姿だった。手には大きな手提げ袋と小さな小袋を下げている。

「ただいま」

信次が言った。

「あっ、ゆき姉ちゃんだ。お帰りなさい」

太郎も嬉しそうに

「おかえりなさい」

と言って玄関に走って行った。

「はい、おみやげ」

ゆきは手提げ袋から小さな紙袋を二つ取り出し、ふたりの弟に一つづつ差し出した。ふたりはそれをもって

「ありがとう」

と大きな声で言った。

「ゆき姉ちゃん、お客さんだよ。……小父さんからこれ貰ったよ」

太郎は雷おこしの袋をゆきの前に持って来て言った。

「あら、そう。どこに？」

ゆきは太郎から紙袋を受け取ると、家に上がりながら居間の座卓の方を見て言った。

「縁側だよ」

「あら、上がってもらえばよかったのに」

「おらもそう言ったんだけど、縁側でいいって」

ゆきには警戒心は全く無いようだった。近所の衆とでも思っているかのようだった。ゆきは台所に荷物を置くと縁側に廻った。賢の姿を見ると、躰を前に屈めて、

「あの、どちらさまでしょうか？」

と言った。

「はい、わたくしは内観賢と申します。実は野岸孝子さんの失踪について、お伺いしたいことがありまして、お伺いした次第です」

「警察の方ですか？」

「いいえ、わたくしは東京に住むものですが、野岸孝子さんが失踪されていたことを知って、訪ねて参りました。実はわたくしにも一度、三時間くらいの間ですけど、消えてしまうというようなことが起きましたので、何か共通点がありはしないかと思ひまして。もし自分の失踪との共通点が見つければ、失踪事件が解決できる手掛りになるかも知れませんので今調べているところです。そうしたらお母さんのことも分かるかも知れませんし」

賢がそう言うと、ゆきは少し涙ぐんだ。

「ここでは何ですから、どうぞお上がりください。それから、これありがとうございます」

ゆきは紙袋を手前に出しながら言った。縁側から身を乗り出して賢に玄関を示し、そちらから上がるように促した。ふたりの子供は喜んで玄関にまわった。賢は全く警戒感を示さない落ち着き払ったゆきという女性に、少なからぬ穏やかな暖かさを感じてほっとした。ゆきは湯飲みにお茶を注ぎながら言った。

「どんなことをお話ししたらいいですか？」

「失踪される前後のご様子を伺いたいのですが」

「はい分かりました。もう警察の方や新聞社の方に何度もお話ししたことです。母は失踪する日の一週間くらい前から、頭がぼーっとして意識がはっきりしないって言っていました。本当にぼーっとしていることが多かったように思います。わたしや弟達に呼ばれて、「あっ」と気付いて意識が元に戻るようなことが何度もありました。わたしたちは母が何か悩み事を抱えていて考え込んでいるのだと思いました。警察の方も、「あの前に誰か訪ねて来なかったか」とか、「変な電話がなかったか」とか、「父からの連絡があったか」とか聞いていましたが、その後の調べでも特に不審な点はなかったようです。ただ母はいつも悩んでいるように見えました。失踪の前日、工作中に三時間ばかり居なくなって、お店の人たちが探し廻ったんです。その間どこにも居なかったんです。でも、母はお店に居たって言ったんです。お店の商品の陳列状態を調べていたんだって。誰も気付かなかったんだって。だけど可笑しいでしょ、三時間も皆が探し廻ったのに見つからなかったんですから。母がどうしても「商品の数を調べていた」って言いほるもんですから、店長もまあいいかってことになって、何事もなかったってことになったんです。でも、翌日母は家を出てお店に寄らずにどこかに行ってしまったんです。今度は本当に可笑しいってことになってみんなで探しました。三日間ぐらい、街や山の中まで探し廻りましたが分かりませんでした。警察の方々も探してくれたんですが、結局何も分かりませんでした。跡形も残さずに……」

そこまで言うと、ゆきは右手で目頭を押さえた。

「生活は今どうしているんですか？」

「わたしがこの春、高校を卒業したものですから、お店の店長さんが母の代わりにわたしを臨時で雇ってくださいました。母は派遣社員でしたので、形の上は会社からお店に派遣されていたようですが、去年の県の一斉調査でお店が県庁から指摘を受けて、この春から派遣を受け入れるのを止めて正規社員にし始めたんです。だから、派遣会社を辞めてお店

に再就職する人もありましたけど、そのまま派遣会社に戻って別の会社に派遣されるようになった人もいます。今は以前よりお店で働く人が少なくなり、とても忙しいんです。わたしはまだ新入りで、母が失踪して間が無いし、子供だけの家庭ということで5時に引かせて頂いています」どうやらゆきが家計を支えているようであった。

「お母さんは保険に入っていなかったんですか？」

「それが酷いんです。入っていたし、しかも失踪も保障の中に含まれていたんですけど、保険会社の人が「事件に絡む失踪しか契約していない」と言って・・・それに「まだ、失踪かどうかははっきりしない」ってお金を払ってくれないんです」

「いま、生活費は大丈夫ですか？」

「母がわたし達の進学用にと貯金してくれましたので、わたしの給料で足りない分を引き出して使っています。でもそれもどれくらい持つか、何とかしなくてはとは思いますが・・・父の籍に入っているんで、母子家庭の申請もできなくて」

「で、さっきおっしゃった保険会社はどこですか？」

「ABC生命保険です」

「その契約書を見せていただけますか？できるかどうか僕が交渉してみます」

「親戚の叔父さんが交渉してくれましたが駄目でした。でも・・・」賢はゆきが自分に対して全く無防備なのを幾分不安にも思ったが、もう自己防衛する余裕もない状態なのかとも思った。賢は受け取った契約書に目を通して大丈夫と確信した。賢は営業をしていたのでこの種の契約については詳しかった。会社側の不払いの為の口実を作った防御壁を打ち破る術を熟知していた。

「この契約書のコピーを取らせていただいてもいいですか？」

「はい、どうぞよろしくお願いします」

「あとで持って来ますから、少し貸していただけますか？」

「はい、どうぞ」

ゆきの人を疑わない応対に賢は感動に似た喜びを覚えた。この親子を守

らなくてはと思った。

「ところで、さっき太郎君が妙な玉を見せてくれたのですが……」

「ああ、あの玉ですね。あれは母が失踪する前の日に弟達にみやげに買って来たものです」

それまで黙って聞いていた太郎が口を挟んだ。

「ゆき姉ちゃん、母ちゃんは「小父さんからもらった」って言ってたよ」

「えっ、そう？わたし、お母さんが買って来たとはばかり思ってたわ」

「ぶつかった小父さんがくれたんだって」

「えっ！そんなことがあったの？」

「ゆき姉ちゃん、知らなかったんだ。父ちゃんによく似た小父さんだっ
て言ってたよ」

「わたし警察の方にそのこと言わなかったわ。太郎、後で詳しく教えて
ね」

「それは言っておいた方がいいでしょう」

賢は念を押した。多分その情報で捜査が進展するとは思われなかったし、警察の捜査担当者も既に諦めている段階だろうと思ったが、やはり警察に情報を入れておくことは必要だと思った。賢はゆきに自分のアパートの住所と電話番号を教え、保険の契約書を手にしてゆき達の家を出た。帰り掛けに太郎と信次が手を振った。賢も振り向いて笑顔で手を振った。車で十五分ほど走るとコンビニエンスストアがあった。そこで契約書をコピーすると直ぐにゆきの家に戻した。今度は裏の空き地に車を停めた。玄関で声を掛けると、ゆきがピンクのエプロン姿で現れた。主婦になり切った姿だった。弟たちは居ないようだった。

「これ、ありがとうございます」

契約書を受け取りながらゆきが言った。

「内観さん、また来てください。わたくしたち心細くて、おくないさまに朝晩お祈りしているんですけど、おくないさまが内観さんを引っ張って来てくれたんじゃないかって、さっき思ったんです」

「おくないさまって？神様ですか？」

「遠野の一番偉い神様なんです」

「そうですか。・・・僕はそんな立派な人間じゃないですけど、明後日又寄ります。きっと旨くゆきますから頑張ってください」

ゆきは賢が立ち去るとき深く頭を下げた。玄関の脇にゆきの小型バイクが停めてあった。1時間ほど走って、花巻駅前のビジネスホテルに着いた。地下の駐車場に車を停めると、トランクの荷物を持ってチェックインした。エレベータで五階に上がり、廊下を十メートルほど行ったところが部屋だった。狭い部屋だったが、シングルベッドが二つ置かれている。夜着が無いことを除いて滞在に必要なものは一応揃っていた。部屋の突き当たりは窓になっていた。その前に小さな丸テーブルがあり、椅子が1脚置かれている。閉まっているカーテンを開けると、眼下に川が望めた。あの北上川だ。賢はベッドに腰掛けて祐子に電話を掛けた。

「あなた、電話待っていたわ」

ふたりだけの時、祐子は賢のことをあなたと呼ぶようになった。

「花巻はどう？こっちは大変だったのよ。亜希子さんが居なくなっちゃったのよ」

賢は驚いた。

「何時から？」

「日曜日にあなたと一緒に地下鉄の駅に見送りに行ったでしょ。亜希子さん一度家に戻ったらいいんだけど、その後で、ご両親に何も言わずにどこかに行ってしまったようなの。そんなことは今まで一度もなかったそうよ。誰も家を出るところを見ていないんだって。でも、旅行用のスーツケースがなくなっているんだって。だからご両親は警察にも言えないでいるらしいの。昨日亮子と例のレストランに行った時、店の人が「亜希子さんの家から問い合わせの電話があった」って言ったの」

賢はあの時、亜希子が泊まりたいと言うのを無理に返したのが悪かったのかと思った。亜希子が失踪して既に三日も経っている。しかし、旅行の支度をした状態で居なくなったことに、賢は多少の安堵感を覚えた。

「あなた、そっちはどうだったの？」

「うん、今日野岸孝子さんの家に行って来たよ。家には高校を卒業したばかりの娘さんと小学生の男の子がふたり残されていて、姉弟三人で生

活しているようなんだ。野岸孝子さんの旦那も彼女が居なくなるずっと前から行方知れずのようなんだ。生活は厳しいみたいだな。でも三人とも屈託のない性格で、助け合って生活しているようだよ。明日はスーパーマーケットに行ってくるよ。で、明後日遠野を少し廻ってから、夕方帰るつもりだ」

「おみやげ楽しみにしているわ。また、明日電話してね」

「分かった。じゃあ」

賢は亜希子のことが気掛りだった。簡単にシャワーを浴びると、外に出た。まだ陽は残っていて、日中の暑気の余波（なごり）がある。賢は駅前にある書店に入って民話の棚を探した。流石に遠野の足下だけのことはあり、この地方の民話関連の書籍や小冊子が十種類以上あった。平積みひら積みの書籍群の中に遠野物語もあった。賢は遠野のむかしばなしという小冊子と三山と三女神という単行本を買った。書店を出てから少し歩き、土産物店に入った。そこで、いわき天狗の置物と遠野和紙の便箋を三冊、和紙の色紙を二枚買って別々に包装してもらった。土産物店を出ると陽は既に落ちて空が紫色になっていた。賢はじゃじゃ麺と看板の出ている店に入った。じゃじゃ麺はこってりした味だった。ここの名物なのかなと思った。ホテルに戻ると今日聞いた話をノートにまとめた。ほとんど思考を止めて、ノートにゆき、太郎、信次の話を写し取っていった。信次の言葉が記憶に引っ掛かっている — 玉が大きくなったり、小さくなったりする。怒ると玉も怒る — これは信次にしか見えないことのようにだった。ゆきの話を書き殴っているとき、ふとゆきの涙ぐんだ眼（まなこ）が浮かんできた。黒く澄んだ目だ。さっきはそれほど気にしなかったが、今回想するとあまりにも深い瞳だった。その瞳に亜希子の瞳が重なってきて直ぐに消えた。一通り書き終えると賢は亜希子の携帯に電話した。しかし電源が切られているという応答が帰って来た。続けて五度電話したが結果は同じだった。賢はベッドに身を投げ出し、そのまま眠りに落ちた。

翌朝は身支度を調べると契約書のコピーを小バッグに詰め込み、1階のレストランで朝食を摂った。朝食はビジネスホテルの宿泊代に含まれて

いた。食事を済ますと野岸孝子が派遣されていたスーパーマーケットに行った。ホテルから二十分ほど走ったところにあった。賢は途中のコンビニで車を止め、近くの電話ボックスに入った。ABC保険盛岡支店の担当者に電話した。やはり、ゆきの言ったように頑なに支払いのできない理由を並べ立てて不払いを正当化しようとしていた。賢は強く言った。「既にこの事件は失踪事件として認定されています。もしこのまま支払いを拒否するなら、CBAにこの事件を企画してもらうように申し入れます。子供三人だけ取り残されている家庭の悲劇と見て、乗ってくると思います」

賢は実際にそう考えていた。ゆき達を守るには多くの人が認識することが手っ取り早いと考えていた。ABC保険の担当者は

「脅すつもりですか？」

と聞き直ったが、賢は

「わかりました。あなたでは埒があきませんから本社に電話します」

と言うと、担当者が電話の向こうで

「一寸待ってくださいよ……」

と叫んでいたが、そのまま電話を切った。賢は続いてABC保険の本社の問い合わせホットラインに電話した。なかなか繋がらなかった。受付嬢から他の担当、また受付嬢、又担当とたらい回しされ漸く契約担当に繋がった。山口という契約担当の男性は声の感じからベテランであると思われた。賢は盛岡支店の担当者との間で交渉が拗（こじ）れている旨を説明し、契約に絡む保険金支払いの義務と、ゆき達の現状について説明した。山口はコンピュータを検索するので一寸待つように言い待機時の音楽が流れた。暫くして山口が再び電話に出ると漸く話が通じ始めた。賢はもう一度これまでの経過を説明した。そしてこの契約の内容と瑕疵、例外事項について賢の意見を言った。最も大切なことは残された三人がまだ子供で契約上は支払いの義務が発生するはずだということだった。CBAの件は口にしなかった。山口はビジネスライクに受け答えし、賢の言い分を理解したので後日回答をすると応えた。賢は「よろしく願います」と言い電話を切った。再び車に戻ると花巻の市街地から少し

外れた処にあるスーパー花巻まで走り駐車場に車を停めた。時計は十時二十五分だった。開店して二十五分経っている。大丈夫だと思った。店舗への入り口は右側にあった。店舗の左側には入り口と同じような作りの出口がある。このスーパーマーケットは中規模だった。ガラス張りの入り口は2重になっていて、外に面した入り口と店に入る入り口の間には買い物籠と、手押し籠が並べられていた。右手の入り口から中に入ると小綺麗な印象を受けた。入って直に西瓜と梨が山積みで陳列されている。右側の壁に沿って野菜や果物が陳列されていて、陳列棚の上から冷気が落ちていた。照明は小さなLEDランプを使ったスポット照明で、そのランプが天井に点々と配置されている。照明の光が陳列品の新鮮さをアピールするのに一役買っていた。壁の陳列棚に沿って進むと、野菜に続いて惣菜、角を曲がって魚類が並べられていて、肉類の陳列との間に事務所通用口と書かれた扉があった。賢は後でここに来ようと考えた。壁に沿った陳列は更にハム、ソーセージ類と続き、また角を曲がると最後に乳製品と飲料が並べられていた。飲料は左側の出口付近まで続いている。店の中には陳列棚が五列ありその列の左右にぎっしり商品が並べられている。陳列棚の間の通路は1.5メートルほどの間隔があった。入り口付近にレジが五台置かれていて、一台のレジに一人の四十歳前後の女性がグリーンの上下のユニホームに、スーパー花巻という店のロゴの入ったエプロンを首から掛けて立っていた。残りの四台のレジはサッカー台の上に「ただいま休止中。他のレジにおまわりください」という立て札が置かれていた。店の中には客が三人いたが、何れも主婦のようでそれぞれ台車を押していて、まだあまり商品が籠に入っていなかった。賢は店の中にゆきの姿を探したが見当たらなかった。店員はこのレジに立っている女性一人だけだった。一通り店の中を廻ってみたが、特に変わったところもなく、普通に見掛けるスーパーマーケットだった。賢は中央の陳列棚を見て、「この辺りで野岸孝子が商品の数を調べていたのか」と思った。レジの女性に近づくと、

「済みません、一寸店長にお目に掛かりたいのですが」

と聞いた。レジの女性は先ほど通り過ぎた店の一番奥の事務所への通用

口の方を指さし、

「店長はあの奥の事務所にいますが、一旦店を出て裏の入り口から入ってください」

と言った。賢が裏手にまわり何も書いてない扉を開くとそこから壁に挟まれた狭い通路があった。その奥に事務所と思われる擦りガラス張りの扉があり、インターホンが設けられていた。賢はインターホンのボタンを押した。ブザー音がして、インターホンから男性の声で「はい」と返事が返って来た。

「あの、内観というものですが、店長さんにお目に掛かりたいのですが」と言うと、また「はい」と返事があり、入り口のドアが開いて30歳前後のユニホームを着た男性が出て来た。

「わたくしが店長ですが」

「わたくしは内観賢と申します。昨年失踪した野岸孝子さんのことで少々お聞きしたいことがありますて」

「警察の方ですか？」

「いいえ、野岸さんの知り合いのものです」

「どういうご用件でしょうか？」

「野岸さんがこの店舗の中で、一時消えたことがあると聞きまして、その時のことを少し伺いたくて・・・これはつまらないものですが・・・」
そう言って賢は雷おこしの紙袋を渡した。店長はちょこっと頭を下げて紙袋を受け取った。

「ああ、そのことですか。その件については、もう警察の方に何度も話しましたが」

「お忙しいところを恐れ入ります。実はわたくしも野岸さんと同じように、一時消えたことがあるんです。自分の一時的な消滅と野岸さんの消滅に何か共通点があると思って東京からやって来ました。原因が分かれば野岸さんの失踪事件を解決できると思ひまして」

「そうですか。今人手が少ないんであまり時間がありませんが、少しなら・・・まあ、どうぞ中に入ってください」

賢を打ち合わせ用のテーブルに案内しながら店長は言った。事務所の中

にはいろいろな商品が所狭しと置かれていた。

「野岸孝子さんの娘さんが内で働いているんですが、ご存じですか？」

「はい、昨日お宅にお邪魔して、ゆきさんからお話を伺いました」

「そうですか。それで、何をお話ししたらよろしいですか？」

「はい、野岸孝子さんの失踪時前後の状態をお話しただけならと思ひまして」

「あの方は本当に素晴らしい人です。わたくしなんかにはとても真似のできない立派な人です。5年間通して派遣契約でしたのであまり立ち入ったことは聞けませんでした。仕事に対する姿勢が他の誰よりも立派でした。それに、生活が厳しいはずだと他の従業員が言っていました。そんな様子はこれっぽっちも態度に出しませんでした。誰にでも優しく、あの方が居るとそれだけで雰囲気が明るくなるような方です。そのくせ、あの方がいなくなってもなんの違和感もない。わたくしどもは時々、あの方がまだこの店で働いているような錯覚を起こすんです。これまでいろいろ立派な人に会いましたが、普通、存在感のある人は居なくなると寂しくて、ぼかんと穴が開いたように感じるんですが、そういう感じが無いんです。まだ居るような気がするんです。でも、失踪する1週間ほど前から、何となく元気がなかったと思います。少しぼーとしていて、どこか具合が悪いんじゃないかと思うようなことがありました。失踪の前日、三時間くらいの間、姿が消えたんですが、その前後は何となくいつもの野岸さんじゃなかったように思います。自分を失っているような感じで。皆が、「ここには見当たらなかった」と言っても、自分では「絶対この店の中に居て、商品の棚卸しをしていた」と言い張りました。確かにあの日は週1回の棚卸しの日で、野岸さんがその担当になっていました。あまりにも確信を持ったように言いますので、わたくしも折れました。そして、何事もなかったことにしました。でも、確かに野岸さんが行ったという棚卸しの数量は間違っていなかったようです。あの日以降の商品の在庫数量に何のずれもありませんでしたから」

「身体の具合が悪かったなんて風に見えませんでしたか？」

「精神的な面はさっきも言ったように少し疑問に感じましたが、身体の方の健康状態は特に問題無いようでした。・・・いつも一緒に働いていた者がおりますので、一寸呼んでみます」

店長はそう言うと、マイクでゆみという従業員を呼び出した。40歳前後の小柄で小太りの女性が店長の座っている椅子の横にやって来た。

「店長、何か用ですか？」

「こちらの方は野岸孝子さんの失踪について調べていらっしゃる・・・えーと」

「内観賢と申します」

「そう、内観さんだけど、あの一時見えなくなる前、彼女なんか具合が悪いなんて言ってなかった？」

「いいえ、ただ意識が定まらないなんて言っていたわ。わたし、「少し休んだほうがいいわ」って言ったんですけど、あの人「大丈夫よ」って。そしたら一時見えなくなったりして、わたしどこかで倒れているんじゃないかって思ったほどだわ。身体の具合は悪くなかったみたいだけど」

「ほかに何か気付いたことはなかった？」

「これは警察の方には話していませんが、一つ気になることがありました。あの消えてしまった日の朝、あの人、おくないさまの夢を観たって言ってたんです。おくないさまが夢枕に立って、一緒に来るように呼んでいたみたいだ。あの頃、あの人ぼーっとしていたんで、一寸、「大丈夫かな」って思ったんです。でも夢の話ですから警察には言っても仕方ないので言いませんでしたけど、本当は心配してたんです。そしたら行方不明になっちゃったんで、おくないさまの祟りじゃないかって心配になって」

「そんなことはない」

店長が否定した。ゆみという店員は店長に「ご苦労様」と言われて、出て行った。賢は事務所の中を軽く見回してみたが、店長の他に事務を執っている若い男性が一人居るだけで、他には誰も居なかった。事務所も、書類や商品のサンプルが机の上に無秩序に置いてある点を除いて気になるところはなかった。賢は店長に丁寧にお礼を言って事務所を出た。

賢は、「ゆきはどこにいるんだろう」と思った。駐車場に戻る時ふと店の入り口を見ると、ゆきが駐車場の方から二台の手押籠を押して来るのが見えた。ゆきも賢に気が付いたようだった。にっこり笑うと頭を下げた。賢は右手を挙げて会釈した。ゆきはそのまま手押し籠を押しながら店の中に入って行った。野岸孝子はゆきの為に大学進学に必要な資金を積み立てていたとゆきが言っていたが、ゆきの姿を見て、ふと寂然とした感情が沸くのを覚えた。おくないさまとはどんな神様なんだろうかと思った。どうやら、この地方で信仰されている地母神であるように思えた。そのおくないさまがどうして野岸孝子の夢枕に立ったのか、そしてすぐ次の日に消滅、失踪ということになったのか、まだその流れが掴めなかった。賢は車に戻ると名立たる六角牛山（ろっこうしやま）の麓まで行ってみようと思った。スーパー花巻を出て南に向かうとやがて釜石街道、国道283号線に出た。昨日通った道のはずだ。暫く花巻の市内を走ると次第に山々が左右に連なるようになって来て、大自然の中を疾駆している自分の姿が見えてきた。左手遠方に静かに佇んでいる早池峰山と思しき山が見える。四億年も前に誕生したと聞く2千メートルに近い山である。普通の植物の育たない蛇紋岩やかんらん岩から出来ているこの山はこの地方では際立った存在なのだ。山裾に霞が立ち込めている。この道が、昨日ゆきの家に行く時に通った道だということを漸く認識できるようになってきた。およそ一時間走ると正面に六角牛山が見えてきた。確信があるわけではなかったが一番目立つ山なので、昨日から六角牛山だと勝手に決め付けている。どうやら遠野盆地に入ったようだ。景色も何となく見覚えがある。やがて238号線への分岐点に至った。昨日はここからゆきの家に向かったのだが、今日はそこを素通りした。途中遠野バイパスから県道36号線に入ると山道だった。深い山に入っていく感じがしたが、30分ほど走ると見晴らしのよい広い牧場地帯に出た。そこからは南に六角牛山が望めた。賢は車を停めて外に出た。日差しは強いが風は心地よかった。ここから見る四方の山々は緑が深く、その向こうには近付きがたい世界があるようで、遠野物語が生まれてきた風土を実感させた。賢は祐子のことを思った。「祐子を連れて来られた

らよかったのに」と思った。そして亜希子のことがふと頭をよぎった。何故か亜希子に呼ばれているような感覚になったのだ。さっきからずっとそんな感覚が続いている。思考を止めて意識を周囲の自然に向けた。一匹の虫の羽音も聞き取ろうと耳を澄ました。眼を半眼にして静かに深呼吸を続けた。時々車の通り過ぎて行く音がした。その他には音を立てるものは無かった。賢は完全に思考を切り捨てた。暫く真っ暗な心の中を只じっと見つめていたが、胸の辺りに亜希子の顔が見えてきた。自分と呼んでいる。いや、呼んでいると言うより呼びかけを望んでいるように思えた。賢は静かに目を開けて深呼吸をした。直感的にここで亜希子の意識に同調してはまずいと感じた。この六角牛山に入ってみたいと思ったが、十分な装備を持っていないことを思い諦めた。賢は遠野のことをもう少し詳しく調べたかった。ここに来る前に、遠野の町中に私立博物館があることを調べてある。博物館は駅から少し南に下ったところにあった。その前の遠野市民センターに車を留めた。博物館の建物は赤土を連想するような色で、博物館と言うより歴史資料館という感じだった。博物館部分は二階に設けられていて、一階は遠野の資料などを蔵書に持つ図書館になっていた。館内は焦茶色をベースにした落ち着いた作りになっていた。柱や照明に工夫を凝らしてありどことなく豪華な雰囲気を作り出している。三万点にも及ぶ資料の中には、神隠しや神々が住まわれた地域を象徴するような展示は見当たらなかったが、この土地に因んだ民族資料が多く展示されていた。賢は図書館に入った。遠野物語に関係する資料や、遠野三山の資料などが蔵されていた。賢は小バッグからノートを取り出し、神隠しの民話と早池峰山、石上山、六角牛山の逸話や資料から参考になる部分を書き写した。この地方は柳田国男が佐々木喜善の語った話を纏め遠野物語として出版してから有名になった。これに似た盆地は日本には無数にあるはずだが、こういう地域が日本民族を育んだ源なのかも知れないと賢は思った。遠野むかしばなし村という施設も併設されていたが、それは明日ゆきの家に来たときに寄ろうと思った。賢は空腹を覚えた。既に4時を過ぎていた。太郎と信次の顔が浮かんできた。今日も朝から虫取りに出掛けているはずだ。暫し寄ってゆき

たいと思ったが、夕方になってゆきに忙しい思いをさせることを思うと訪れるのは気が引けた。賢は花巻に戻る為に釜石街道に乗った。およそ一時間走って花巻市内に入った。入り口の前に駐車場を設けてある陸奥食堂という名の食堂で食事をすることにした。まだ暖簾（のれん）を出したばかりのようだった。駐車場には打ち水をしてあり、暑気の中にも一服の清涼味を感じる。店に入ると、「いらっしゃい」という活気のある声がした。店内はそれほど広くなく、テーブルが四脚とカウンター席があるだけだった。カウンターにはレンズの厚い眼鏡を掛けた20歳前後の青年が丼ものを食べていた。賢もその青年の横に一席空けて座った。

「外は暑いでしょう。何にしますか？」

50歳程の店主が水のグラスを賢の前に出した。賢は何も見ずに訊いた。

「定食はありますか？」

「はい。定食一丁ね」

そう言うと店主は賢の方に視線を投げ掛けた。

「お客さん、どちらから？」

「東京からですけど、どうして分かるんですか？」

「そりゃ、50年からここに住んでりゃ一目で分かりますよ。お客さん、旅行ですか？」

人当たりのよい主人だった。

「いいえ、去年遠野の方で行方不明になった方がありますね。そのことを調べに来たんです」

「へえー、お客さんは新聞社か何かの方で？」

「いいえ、一寸研究しているんです」

賢は不意に研究という言葉を使ったが、自分でも不自然に感じた。

「へえー、研究でなすか？神隠しかなんかの研究でがんすね？」

「はい、実は自分の身边でもそんなことが起きたものですから、関連性を調べようと思って」

「あの事件の時は、遠野じゃ大騒ぎになったんでがんすよ。なんせ、遠野物語なんかで神隠しについてよく知られるようになってるだけじゃ。儂らの時代までは、みんな年寄りから聞いて知っていたんでがんすが、

近頃は、そんな話は民話集や小説でなけりやお目にかかれませんがんすから、目の前でそう云う事件が起きて、みんな複雑な気持ちになったって訳でがんすよ」

主人は「お待ちどう」と言っ、定食を盆に載せて賢の前に出した。鯖の味噌煮とほうれん草の和え物、カボチャの煮物に味噌汁、ご飯が載っていた。主人は盆を置くとすぐに湯飲み一杯に注いだお茶を盆の横に出した。賢が「いただきます」と言っ、割り箸を手にしたとき横に座っていた青年が話し掛けてきた。

「あの一、失踪事件のことを調べてるんすか」

「ええ、昨日も野岸孝子さんの家に行っ、来たんです」

「俺もあの事件のことを調べたんすよ。もし興味があれば俺の調べたことを教えますけんど」

賢には思い掛けないことだった。

「是非、教えていただきたいです」

「それじゃ、食事が済んだら話しちゃいますよ」

賢はお礼を言い、慌てている様子を見せないようにしながら、できるだけ急いで食べた。定食にしては美味だった。食事が済むと意識してゆっくりお茶を飲んでから言っ、

「お待たせしました。わたくしは内観賢と申します」

眼鏡の青年はとっくに食事は済んでいたが、静かに待っていた。

「鹿島康介す。俺の家、花巻市内なんすけんど、来てくれれば集めた資料も見せますよ」

ふたりは食堂を出た。賢のレンタカーで、10分ほどで鹿島康介の家に着いた。住宅地にある一戸建ての二階屋だった。家の前に車を停め、賢は康介の後に付いて家に入った。康介が玄関の扉を開けると、上がり口から廊下が真っ直ぐ奥にまで延びていて、突き当たりに扉があった。入り口の右手には階段がある。

「上がってよ」

康介がさりげなく言っ、賢はいきなり他人の家に上がるのは、気が引けたが、大きな声で声を掛けた。

「おじゃまします」

奥の扉が開いて、40歳前後の瘠せた女性が顔を出した。

「康介、お客さん？・・・どうぞ」

賢は「失礼します」と言って上がった。康介は「こっち来て」と言いながら階段を上がって行った。賢も後を追った。二階の部屋に入ると賢は夥しい数の写真に圧倒された。壁全体が写真で埋め尽くされている。窓も半分は写真に占領されていて、辛うじて半分が開け閉め出来るように、写真の一部を折り曲げてあった。新聞写真を写した様な白黒のものが半数、残りはカラー写真だった。中には刃物や自動車など、関連性の分からない写真も一見無作為に貼られている。賢が写真を見回しているのを見て、康介は「事件の写真だよ」と言った。写真にはおどろおどろしい雰囲気を感じさせるものは無かった。ここまで来る車の中で、賢は事件のあらましを康介と確認し合った。康介の話す情報には始めて耳にする事実は含まれていなかった。康介は物証的な内容にポイントを置いて調べているようだった。

「この事件は、警察が調べた限りじゃ、物的証拠が無いんすよ。だけど、俺は少しおかしいと思っていることがあるんす」

「そうですか。野岸孝子さんは何か痕跡を残したんでしょうかね」

「車すよ、車。あん人、車と一緒に失踪しているんすよ」

「それはですけど、警察が徹底的に調査しているんじゃないですかね」

「勿論、ナンバー、車種、年式、車検から野岸孝子さんの免許証に関する内容、そういう情報は徹底的に調べ尽くしていると思うんす。だけんど、警察は野岸孝子さんがあそこからどこか遠くに車で出掛けてって、失踪したっちゃう固定概念に捕われているように思うんす」

「と言うと、もっと別の切り口があるとでも？」

「俺もあの家に行って、辺りを調べたんす。あのころは天気が悪くて、あの家の回りの道にや車の轍が残っていたんす。車輪の跡が重なってて、よく判別つかなかったんすけど、俺は虫眼鏡まで持ち出して調べたんす。勿論警察の居ない時にな。警察がいると煩いすからね。尤も警察はもう、

車はあの一本道から出て行ったと思っ込んでいたから、おれが道を調べても関心なかったと思うけど。だけんど、面白いことに気が付いたんす。野岸孝子さん、一旦スーパーから帰って来たけど、その後車で出て行ってはいなかったんす。入って来た轍に出て行った轍が重なって付いてなけりゃおかしいしょ、それが来たときの跡しかなかったんす。おれは確信が持てたんす。あの場所で消えたんすよ。だけんど、なぜかとか、どういう風にとかいうことが分らんから、そんただことを言うと馬鹿にされんで俺は黙っているんすが」

康介は自分で撮った写真を見せながら話した。賢は驚いた。康介の話を聴く限りでは、野岸孝子はあの場所で消えたことになる。亜希子のことが賢の頭を過ぎった。テレポーションかも知れないと思った。しかし、野岸孝子はどこにも現れていないのだ。康介は何枚かの写真を見せてくれた。その中には孝子の全身が写った写真や、乗っていた車の写真もあった。康介は孝子の写っている写真を賢に渡して、

「この写真やるすよ。こっちにはデジカメのデータがあるすから」と言った。康介はその他の失踪事件についても調べたようだが、やはり、岩手県内で起きた事件に重点を絞っているようだった。江川のことを聞いてみたが詳しくは調べていなかった。賢は自分の連絡先を知らせ、康介の住所と電話番号を聞いてノートにメモした。康介に礼を言うと賢はホテルに戻った。ホテルの部屋に戻ったのは6時10分過ぎだった。賢はシャワーを浴びてから祐子の携帯に電話を掛けた。明るい祐子の声で一気に元気が出た。

「あなた、待っていたわ。今日はどうだった？」

賢は野岸孝子の失踪が家の前で起きたらしいと告げた。

「そう？ますます分からなくなるわね」

賢には一つの仮説が出来上がりつつあったが、それは口にしなかった。祐子は賢が帰るのを楽しみにしていると言った。亜希子については依然として進展が無いようだとも言った。電話を切ると、賢は一日の出来事のまとめを始めた。ベッドは二つある。入り口の方のベッドに俯せて、記録を書き殴った。この日の最も大きな意識の変化は野岸孝子の夢枕に

立ったおくないさまと孝子が家の前で消滅したことだった。さっき康介からもらった孝子の写真を小バッグから取り出して眺めた。孝子は祐子と同じような体型の優しそうな顔をした女性だった。顔は祐子よりやや面長で眼も祐子より細めだったが、年齢の差を差し引いても祐子よりずっと落ち着いた感じである。家の前で撮ったポートレート写真だった。じっと見ていると厳かささえ感じてきたが、次第に孝子の姿の上に亜希子の姿が重なってきた。賢は亜希子がどうなったのか心配が昂じてきた。意識を亜希子に移してみることにした。ここなら、暫く動かないので、亜希子の意識に焦点を当てても、亜希子にとって危険は無いと思った。賢は眼を瞑って瞑想し、意識を内側に向けた。亜希子のイメージを強く胸に描いた。初めはぼんやりとした亜希子のイメージが次第にはっきりしてきた。非常にリアルな感じになってきたイメージが突然パッと輝いて消えた。賢は大きく息を吐いて眼を空けた。日が落ち、室内は暗くなりかけていた。照明を付けようと思って身を起こして賢ははっとした。入り口のところに亜希子が立っていた。輪郭がはっきり掴めず、まるで亡霊のようだ。賢は気の所為かと思って目を擦った。亜希子はそのまま立っていた。次第に亜希子の姿がはっきりしてきた。賢は二つのベッドの間にある照明のスイッチをONした。部屋がパッと明るくなって、亜希子の姿が明瞭になった。右手にスーツケースを握っている。

「亜希子さん！……」

賢は次に言う言葉を探した。

「賢さん、わたくしどうしたのかしら。ここはどこ？」

「ここは花巻だよ」

「えっ！だって、さっき賢さんのアパートから戻ったばかりなのに。賢さん、どうして花巻になんて……」

亜希子はふと我に返ったように言った。

「もしかして、失踪事件のこと調べに来ているのかしら？」

しかし、まだ明確に自分のいる場所についての認識ができていないようだった。賢はテレポーションだと思った。テレポーションが相当の時間を経過しても起こり得ることに驚きを覚えた。

「亜希子さん、テレポテーションだよ。君は俺のアパートから帰った日の夕方自宅の部屋で消えたんだよ。そして三日後の今、ここに現れたんだよ」

「わたくし山陰から帰ってからのいろいろ忙しくて、両親に叱られて、それにお見合いなんて絶対したくなくて、やさしいあなたにお会いしたくてたまらなくなったのです。自分の部屋に戻ってから、急いでスーツケースの中からあなたからお借りた衣類だけ取り出してお返しに上がったのです。あなたにお会いしたら、ますます帰りたくなくなって、泊めて頂きたかったのですが。……がっかりして部屋に戻って、スーツケースの中を整理しようと思って取っ手を握ったとき我慢出来ないほどあなたにお会いしたくなってしまって、たった今お会いして来たばかりなのに。そこでじっとあなたの姿を思い浮かべていたのです。そしたらふと体が軽くなって、記憶がなくなったような感じになりました。でも、あなたに呼ばれて急に記憶が戻ったようなのです。その前は何て謂うか、体はなくて意識だけある変な感じだったのです。一本の線の上を滑ってゆくような感じなのです。あなたの元に来ようと必死だったように思います。そしたら、急に何か熱く重たい感覚がして来て、気付いたらここに居ました。あなたに言われて初めて自分が花巻にいることを知りました」

賢はその状況に思考を巡らせ、亜希子をじっと見つめながら言った。

「亜希子さん、食事は取ったの？」

「いいえ、もう胸が一杯でしたから、食事など……」

「そうか、それじゃ後で一緒に出掛けよう」

「はい……申し訳ありませんが、その前にシャワーを浴びさせていただけますでしょうか？わたくし、失意の底にいましたので、ずっと……」

「それは構わないけど、まず部屋があつたらチェックインした方が……いや、その前にご両親に電話して、無事なことを説明した方がいい。それから俺も友達に連絡するよ。みんな君のことを心配して探しているから。でも、テレポテーションのことは言わない方がいい。君

が狂ったと思われる危険性があるからね」

亜希子は自宅に電話した。電話口には父親が出た。こんな時間に父が家にいることで、亜希子は事の重大さを思い知った。自分が見合いの話で混乱し、そのまま旅行に出たと説明した。父親は「見合いの話は断るから、直ぐ戻って来なさい」と言った。亜希子は2、3日したら戻ると返事をした。賢と一緒に言うことは口にしなかった。電話口に母親が出た。すぐに花巻に来ると言った。亜希子はそれを止めるように頼んだが母親は言うことを聞かなかった。

「これからそちらに向かうわ。亜希子、どこにも行ってはいけないわよ」
亜希子は断り切れなかった。賢は祐子に電話を掛けた。祐子の携帯は不在メッセージを流していた。賢は亜希子がこのホテルにテレポーションしたことを告げて、同じホテルに宿泊することになるだろうということをメッセージに残した。電話を済ますとふたりはフロントに降りた。ホテルにはまだ空室があるらしく同じフロアの部屋を確保できた。ふたりはフロントのロビーで待ち合わせることにして一旦部屋に戻った。賢はシャワーを浴びるとすぐにロビーに降りた。ロビーとは謂ってもエレベータの前に二人掛けのソファーが置いてあるだけの狭い場所だ。十分ほどして亜希子が降りて来た。亜希子は山陰で二日目に着ていたブラウスを身に着けていた。石けんの香りが亜希子の白い肌に瑞々しさを添えている。ふたりは花巻の街に出た。街の中にあるイタリアンレストランで食事を摂ってから、橋を渡り北上川の畔（ほとり）を歩いた。賢は亜希子の不安を和らげようと、左手でそっと亜希子の右手を握った。亜希子は少し顔を赤らめたが、賢に寄り添うように歩いた。爽やかな風が川に沿って吹いて来る。上流の方から流れに誘われて吹いて来るようだった。花巻の夕暮れは秋の様相を呈してきていた。

「わたくし、怖いの」

亜希子は呟くように言った。

「どこかに消えてしまいそうで・・・」

「悪いことが起きている訳じゃないと思うよ。自然に、自分に起きていることを受け入れてごらん。抗ってはだめだと思うよ」

「どうしてこんなことが起きるのかしら」

「それは俺にも分からない。でも、少なくとも俺が意識を集中して亜希子さんのことを思うと、君と繋がるようだ。それも、亜希子さんの意識も俺の方を向いているときに特に強く繋がるようだな」

「わたくしたちだけが特別なのかしら」

「俺の考えじゃ、誰でもその可能性を持っているけど、今の君と俺はその可能性が高いということだと思う」

「賢さん、わたくし何時もあなたと一緒に居たいんです。あなたと離れるととても不安になって、意識も不安定になって来るのです。どうしたらいいと思いますか？」

「俺にも分からない。多分誰も理解してくれないだろうな。まあ、少し考えてみるよ。つまりは・・・いつも俺の近くに居ればいいということか」

「はい」

「俺んちの近くに引っ越して来るか？・・・どうするかは後で考えるとして、それが一番簡単だけど・・・」

ふたりがホテルに戻ると、フロントの女性が亜希子にメモを渡した。母親からだ。午後9時頃花巻空港に着くとのことであった。そこからタクシーで来るので宿を確保するようにとの伝言だった。幸い亜希子の部屋はツインルームだったのでそのまま滞在者数を増やすだけで済んだ。

「今日はお母さんを傷付けないように、気まぐれでここに来たことにしておいたほうがいい。俺のことは口にしないことだ」

「はい、わたくしもそれがいいと思います」

「賢さん、いつ帰りますか？」

「明日の夕方帰るつもりだ。野岸孝子さんのことをもう少し調べてから帰るよ」

「わたくしもお手伝いさせて頂きたかったのですが、母が来たのではそれも難しいと思います」

「それじゃ、また東京で」

ふたりはエレベータで5階に上がり、それぞれの部屋に戻った。賢が部屋に戻ると直ぐに電話のベルが鳴った。祐子だった。

「もしもし、あなた？」

「祐子か、メッセージ聞いたか？」

「うん。亜希子さんまたそっちに行ってるの？」

多少不機嫌な感じが伝わってきた。

「うん、テレポーションみたいだよ。よく分からないけど、俺たちが地下鉄の駅で別れた後、一度自分の家に戻って自分の部屋からテレポーションしてしまったみたいだ」

「でも、どうしていつもあなたの近くに現われるの？」

賢は詳しい話はしなかった。

「うん、不思議だがよく分からない。いま、お母さんがこっちに向かっているんだ」

「亜希子さんから電話したのね」

「うん、亜希子さん自分でもどうしていいか分からないよなんだ」

「亜希子さん、あなたのことばかり考えているんじゃないかしら？だからあなたの近くに現れるんじゃないかな」

「分からない。・・・兎に角、明日はもう一度遠野に行ってみるよ。面白い話があるんだけど帰ってからの楽しみだな」

「えっ、なに、なに？ねー、教えて？」

「少しくらいは後に残した方が、楽しみがあっていいからな」

祐子は不満そうだったが諦めた。電話を置くと賢は急に眠気に襲われた。ベッドに身を投げ出すと深い眠りに落ちた。ドアを叩く音にハッとして目が覚めた。時計を見ると十一時を回っていた。亜希子だった。

「ごめんなさい。母がどうしても賢さんにお会いしたいって。一人でこんなところに来るのは納得がいかないって、問い詰められてしまっつい・・・ごめんなさい」

「分かった。心配しなくても大丈夫だよ」

賢は部屋に鍵を掛けると亜希子の後に附いていった。亜希子は自分の部屋に向かわず、エレベータに乗った。フロントの脇に入り口のあるスナ

ックのカウンターで亜希子の母親は待っていた。

「初めまして、内観賢と申します」

賢は深く頭を下げて挨拶をした。母親は賢に飲み物について聞いてから、カウンターのボーイにそれを注文した。

「夜分、大変失礼とは存じましたが、何分娘は世間知らずなものですから話がよく分かりませんので、内観さんに直接お話をお伺いしたいと思ひましてご無理を申し上げました」

非常に礼儀正しく毅然とした話しぶりだった。ほんの少し非難の意志を入れて話しているのが分かった。賢は応えた。

「いいえ、とんでもございません。本来ならわたくしの方から状況をご説明申し上げるべきだったと思います。花巻に来る前にお嬢様にわたくしの調査計画をご説明させていただいておりましたので、こちらにお見えになったのだと思います。何かとてもお心を痛めておいでのようですので、夕食をご一緒させていただきました」

「大変不躰で申し訳ございませんが、娘とはどういう間柄なのでしょうか？」

「はい、友達です。二週間ほど前にわたくし達四人のグループの仲間にお入りになりました。時々社会情勢の話をしたり、興味のあることを調べたりする気の合った者同士のグループです。お嬢様を入れて女性が三名、男性が二名のグループです」

「そうございましたか？娘はそんなことちっとも話さないものですから、主人もわたくしも今度の事でただおろおろするだけでございましたの。ですが、娘にいつからここに来たかと聞いてもちっともはっきりしたことを言わないものですから、ご無理を申し上げて」

「いいえ、そんなにお気になさらないでください。わたくしもそこまで気が付かなくて大変失礼致しました。お嬢様は今日の夕方このホテルに移って来られました。それまでのことは、よく覚えておられないようです。このホテルでお会いして記憶が戻られたようなのです。どうやら、ここ数日の記憶は無くされているようです。何か精神的なショックを受けられたのではないのでしょうか？ですから、あまり追求なさらない方が

よろしいかと思えます」

亜希子が近くで聞いていたが一言も口を挟まなかった。心なしか目に涙を浮かべているように賢には思えた。

「失礼ですがもしお差し支えなければ、どのような目的でここにお泊まりになっておいでなのかお聞かせ頂けないでしょうか？」

「はい。少し専門的な話になりますが、わたくしたちは最近起きている失踪事件の原因を調べているのです。今、社会に変化が起きているような気がして、その変化の原因を突き止めようとしているのです。一連の失踪事件はその前触れじゃないかと思っているのです。社会に規範の倒錯が起きるのではないかと思っているのです」

「よくは存じ上げませんが、そのようなことは警察とか政府の機関が行っているのではないのですか？」

「はい、そうかも知れませんが、社会通念を覆す様な原因は公的機関の想定外だと考えています。わたくしたちは「誰かがやらなくては」と考えて調査しています」

母親は賢の話にあまり興味を示さなかった。しかし、何かまじめに取り組んでいるらしいという感触を覚えたようだった。

「そうですか。・・・夜分遅くに大変失礼致しました。娘は、明日の朝家に連れて帰ります。あなた様はいつまでこちらにご滞在でいらっしゃいますか？」

「明日一杯調査を続け、夜東京に戻る予定です」

「そうでございますか？夜分遅くに大変失礼を申し上げました」

「いいえ、とんでもございません。わたくしこそ礼儀を失してしまい、申し訳ございませんでした」

亜希子が「お休みなさい」と一言だけ言った。母親がカウンターボーイに部屋のキーを見せ、勘定書にサインをすると亜希子と共に席を立った。賢はスナックの入り口まで附いて行き、「失礼致します」と言って頭を下げてふたりを見送った。エレベータに乗ると母親は亜希子に言った。

「礼儀正しいお方ね」

亜希子は黙って頷いた。翌日賢は八時半近くに目が覚めた。急いで身支

度を調べて荷物をまとめると、フロントに行きチェックアウトをした。亜希子と母親は一時間前にチェックアウトを済ませていた。賢はホテルのレストランで食事を摂ると直ぐに出発し、街中の玩具店に寄った。まだ店を開いたばかりだった。賢は寄せ木のパズルを2つ買った。ゆき達の家に着いたのは十一時頃だった。裏の駐車場に車を停めると、賢は今来た道の土質を確認した。昨日康介が言ったことの信憑性を確認しようと思った。砂利を含んでいるが、確かに粘土質の土だった。天候の悪い日には車の轍が残ると思われた。「やはりここで野岸孝子は車と共に消えたのかも知れない」と思った。

「ごめんください」

賢が玄関から声を掛けると、太郎が飛び出して来て言った。

「あっ、小父さん。ゆき姉ちゃんは仕事だよ」

「太郎君、信次君も呼んでくれないか？」

「うん！信次ー」

信次が飛び出して来た。

「おみやげだぞ、はいこれ。一つずつだよ」

賢が寄せ木パズルを渡すと、太郎がにこにこしながら言った。

「ありがとう、小父さん」

信次も寄せ木パズルの方に顔を向けながら、兄を真似た。

「ありがとう、小父さん」

「小父さん、開けてもいい？」

太郎が訊いた。信次も真似をして同じ言葉を繰り返した

「いいとも。太郎君、この間みたいに縁側の戸を開けてくれないか？」

「小父さん、開いてるよ。毎日はおれが開ける役目なんだ。外に出るときは閉めるけどな」

がらがら音を立てて、太郎が縁側のガラス戸を一杯に開けた。賢は庭に廻り縁側に腰を掛けた。太郎と信次は包みを開け中から寄せ木パズルを取り出している。信次は寄せ木の駒を取りこぼし形がバラバラになった。元の形に戻そうとして必死になっていたがとうとう観念した。

「太郎兄ちゃん、直して」

パズルの箱を畳の上に置き、説明書を読んでいる太郎の肩越しに覗き込んだ。賢は太郎に話しかけた。

「太郎君、小父さんにあの変なボールをもう一度見せてくれないかな？」

「うん。いいよ」

太郎は奥に駆けて行って、ボールを抱えて戻って来た。信次は太郎の寄せ木パズルをひっくり返してバラバラにしてしまっていた。

「はい、小父さん」

太郎はボールを賢に渡した。

「ありがとう」

賢はその奇妙なボールを手にとって眺めた。

「おい、俺のをいじったな？」

太郎はそう言って信次を睨んでいたが、やがてふたりとも自分の寄せ木パズルに必死に取り組み始めた。賢はそのボールをよく観察した。堅いプラスチックの様な外郭なので、どこかの工場で作られたものではないかと考えた。工場で製造されたものならば型の跡か継ぎ目が残っているはずだったが、どこにも見当たらなかった。空気を入れる栓も見当たらない。「普通に売られているものではなさそうだな」と思った。西瓜のようで、ビーチボール程軽くはない。中から薄い青色が滲み（にじみ）出してくるように見える半透明の外皮は、まるで呼吸しているかのようだ。賢はボールに意識を集中してみた。なんとなくボールが反応しているように感じた。賢はこれまで何度か、いろいろな物質に対して意識を集中してみたことがあるが、それらの物質からの反応を強く感じたことは無かった。しかしこのボールは違っていた。慈しむ意識で対峙すると、自分の胸が温かくなってうれしさがこみ上げてくるのが分かった。挑むような意識で対峙すると、手足に妙な違和感を覚えた。確かに信次の言うような反応をするようである。怒りをぶつけてみたかったが、どうして憤怒を引き起こしたのか躊躇した。暫くいろいろな意識を投影していると信次が急に泣き出した。

「おれ、悪くねえぞ」

太郎が怒っている。

「信次、俺が折角うまく出来たのに、なすて壊すんだべ？」

どうやら太郎がくみ上げた形を信次が壊してしまったようだ。賢はふとボールを見た。ボールの中の青色が少し紫色に変わっているように思える。太郎が信次の頭を小突いた。信次がわっと泣き出した。ボールは明らかに青色から葡萄色に変わってきている。

「おい、おい、喧嘩をするなよ。仲良く遊ばなくちゃ駄目じゃないか」

「太郎兄ちゃんがぶったー」

信次は一層大きな声で泣いた。賢はふたりに話し掛けた。

「ふたりとも、一寸来てみろよ。君たちが喧嘩をしたらこのボール色が変わったぞ」

太郎は跳んで来た。信次は目を擦り睨り上げながら、もじもじと賢のところに寄って来た。

「おら、そのボールきれえだ」

ボールはまだ紫色のままだ。太郎が叫んだ。

「本当だ！おい、信次、見てみろ」

「おれ、前からそんただこと知ってら。こいつ、でっかくなったりちっちゃくなったりするんだじゃ」

信次は一昨日と同じ事を言った。

「太郎君、君たちお昼はどうするんだ？」

「今日は、ゆき姉ちゃんがパン買って食えって、五百円くれたんだ」

「いつも、ゆき姉ちゃんがお金くれるのか？」

「んたなことねえ。今日は特別だ。ゆき姉ちゃん、用事があるからって早く出掛けたんで、おれっちの昼飯作れなかったんだ」

「よし、それじゃ小父さんがお昼をごちそうしてやるよ」

「わあ、小父さんほんとだべ？ 信次ごちそうだぞ！」

「おれもごちそう食えるだべか？」

「ああ、ふたり一緒だよ。何が食べたい？」

「おれ、鰻が食いてえ」

「おれも鰻が食いてえ」

「よし、それじゃ、戸締まりをしろよ。もう11時50分だから、直ぐ

に出掛けよう」

ふたりはボールを奥に持って行くと、寄せ木パズルを箱に戻した。箱にはきちんと入らなかったが、できるだけきれいに並べようとして二段に重ねてその上に蓋を被せている。ふたりとも同じようにした。ふたりは大事そうに箱を持って奥の部屋に入って行って、押し入れの中にそれを収めた。破れた包装紙は太郎が信次の分も手際よく片付けて部屋の隅に置いてある緑色の円筒形のゴミ箱に捨てた。

「小父さん待っててね」

太郎はそう言うのと縁側の戸を閉め、内側から鍵を掛けた。少しして玄関から出て来た太郎は、引き戸を締めてきちんと鍵を掛けた。賢は野岸孝子がこの子達を育ててきた心が感じられた。それは躰が行き届いているという感じではなく、もらったものに対する喜びの表現であり、子供らしさの中にも自分達の行動を確認しながら行っているような自然な姿に見えた。

「おじさん、お待ちどうさま」

太郎が言った。賢はふたりを車に乗せ、太郎に道を聞きながら遠野の町中にある鰻店に行った。食事をしながら賢が言った。

「君たち、ゆき姉さんが勉強するように言ってなかったか？」

「あんまり勉強しろって言わないよ。おれっち、学校の先生が宿題を出してるからそれをやればいいんだ」

「んだ、んだ」

信次も同調した。

「へえー、じゃお母さんも勉強しろって言わなかったのかい？」

「母ちゃんは勉強のことはなんも言わん。母ちゃんは学校のテストで0点のときも笑ってたな、なあ信次」

「んだ、んだ」

「じゃ、学校の勉強はせんでもいいって言ってたのかい？」

「いいや、そんたなことはねえ」

「決まってることはちゃんとやれって、時々言ってた。だけんど母ちゃんはやさしかった」

「んだ、んだ。おれ、母ちゃん大好きだ」

食事を済ますと、賢はふたりを家に送った。家に着くともう1時近かった。賢はもう一度ゆきに会ってからここを去りたいと思った。

「太郎君、信次君、今日は小父さんと一緒に居てくれるかい？」

「いいよ」

「おれもいいよ」

「小父さんはこの近くの神社に行ってみたいんだけど、連れて行ってくれるかい？」

「小父さん、南部神社のことだべ？」

「いや、伊豆神社がいいんだけど」

「おれ、こええ。あそこは蛇がいるで、母ちゃんも子供だけで行っちゃいかんと言ってたべ」

信次が怯えた様子を見せた。

「信次大丈夫だよ、小父さんが一緒だから。おくないさまを拜んでくるべ」

太郎はそう言って車から降りた。木々に囲まれた薄暗い丘を登った所から急な参道が続き、その奥に神社の祠があった。あちこちに蛇の彫刻が施されている。神社の境内に立つと涼しい風がどこからともなく吹いて来る。どこから吹いて来るのか分からなかった。前から吹いていると思うと、右から、そして後ろ、左と吹いて来た。暫く境内に佇んでいると身が清められてゆくような気がしてきた。太郎は神社に拝礼をして祈りを捧げている。信次も真似をしている。戻って来た太郎に賢は声を掛けた。

「何をお願いしたんだ？」

「おれ、お願いはせん。お礼を言ったんだ。母ちゃんがいつも「おくないさまにはお願いをしちゃいけん、お礼を言え」って言ってたから、俺、お礼を言ったんだ。「母ちゃんを捜してくれる小父さんが来てくれてありがとうございます」ってお祈りしたんだ」

「おれは、母ちゃんに会いてえけど、「小父さんがパズルをくれてありがとうございます」ってお礼しただ」

賢は子供達に促されたように、祝詞をあげ、与えられた運命への感謝を申し述べた。拝礼を済ますと深呼吸をした。意識が洗われるような感覚を覚えた。子供達は元気に参道を駆け下りた。賢も後を追った。車に戻ると賢は子供達に聞いた。

「今度は、六角牛山神社に連れて行ってくれるかい？」

ふたり同時に「うん」と応え、車に乗り込んだ。

「笛吹峠の方に向かって行けば直ぐだよ」

太郎が言った。一旦街に戻り、県道35号線を十五分ほど走ると確かに道路の右手に六角牛山神社があった。ここから六角牛山に登れる。鳥居は風雨に晒されて塗装が剥げているが、周りの自然と調和して静かに立っている。そこから拝殿まではまさに山道だった。拝殿は落ち着いた厳かな雰囲気を出している。3人は一緒に参拝した。賢は遠野三山の神社を巡りたかった。

「よし、次は石上神社だ。分かるかい？」

子供達に尋ねてみた。ふたりとも知らなかった。賢はレンタカーに常備されていた地図を調べ、今来た道に戻った。

「小父さん、どういう神社なんだべか？」

太郎が訪ねた。

「遠野三山を守っている神社さ。あと石上山の石上神社と早池峰山の早池峰神社だよ」

「おら知ってる。母ちゃんに聞いたことあるだ。女の神さまの神社だって」

石上神社は綾織町にある。古い鳥居を潜るとこんもりと茂った林の中に石段があった。そこを登って進むと途中にもう一つ朱塗りの鳥居があり、鳥居をくぐり抜けて石段を登り切ると奥にこじんまりとした拝殿があった。祠を少し大きくしたほどの神社だった。古めかしい建物の前に新しい賽銭箱が置かれている。三人はまた、同じように礼拝を行った。子供達はいつも同じ祈りを捧げているようだった。突然、信次が「きゃー」と悲鳴を上げて社殿から跳び離れた。一匹の山棟蛇（やまかがし）が社殿の石段の下から這い出して来て社殿の裏に逃げ去った。

「山棟蛇だ！こいつ毒があるんだぜ」

太郎が言った。信次は暫くびくびくしていたが、やっと元気を取り戻した。三人は石上神社を後にして近くにある続石を見ることにした。賢が先頭に立ってこんもりと木々の茂る石上山に入る山道を登ってゆくと、基礎石の上に載せられているドルメンのような巨石が現れた。長さは7メートル、幅も5メートルはある。近づくと岩が落ちてきて押しつぶされそうな錯覚を覚える。

「この石は弁慶が載せたって、母ちゃんが言ってたぞ」

太郎が言った。悠に数十トンは有りそうな巨石を、「誰が何の為にこんな山中に置いたのか、どうやって置いたのか」などと思いを巡らせたが、賢はこの巨石の話が「遠野物語」に載っていたのを思い出した。古の人は石を使っているいろいろなものを造っている。そういうことにもこの世界の構造を知る手掛りがありそうだった。三人は続石を後にしてまた遠野の街に戻った。そこから早池峰山に向けて二十分ほど走ると早池峰神社の参道の前に出た。参道は著名な神社の参道に匹敵する程奥が深い。太郎は参道を駆けてゆく。信次はその後を遅れまいと必死に追って行く。木々に囲われた参道の先には山門があった。この山門は竹を編んで作った壁に茅葺きの屋根を付けた造りになっており、形は他の神社の山門に似ているが、ずっと質素で自然な感じがする。賢はふと「元々神社とはこのようなものだったのではないか」と思った。山門の奥に社殿があった。社殿は恐らく誰が見ても直ぐにはそれと分からないような、茅葺きの民家のような形をしている。これが遠野の神社なのだと感じた。遠野の最高峰早池峰山を守る神社は、自然の一部として立っていた。お参りを済ますと既に5時を回っていた。賢はふたりの子供を乗せ、ゆき達の家に戻った。家に着くと太郎は車から飛び出すように降りて、玄関に駆けて行き鍵を開けた。まだゆきは戻っていなかった。賢は太郎が開けてくれた縁側に腰掛けてゆきの帰りを待った。6時を15分ほど過ぎてゆきが帰って来た。

「あら、内観さん、いらっしゃったのですか？どうぞお上がりください」

「はい、またおじゃましています」

太郎が言った。

「ゆき姉ちゃん、小父さんにパズルのおみやげをもらったんだ。鰻もごちそうしてもらっちゃった。それから、小父さんがお参りに連れて行ってくれたんだぜ」

太郎と信次が手に持って見せている寄せ木パズルの箱を見ながらゆきは「あら、よかったじゃない」と言い、賢の方を向いて言った。

「内観さん、ありがとうございます。弟たちにこんなにさせていただいて」

「いいえ、今日は太郎君、信次君と一緒に過ごしたいと思ひましてね。それに、折角遠野に来たので一緒に伊豆権現さんと遠野三山の神社にお参りに行って来たのです」

「あら、そうでしたか。弟達は面倒をかけませんでしたか。神社、古かったでしょう？あんな古い神社でもお祭りの時は賑わうんですよ」

「そうですか。お祭りの時に来たらさぞ楽しかったでしょうね」

そう賢が言うと、信次がそれを聞いて

「おれ、お祭り、大好きだ」

と言った。太郎が

「暗いところが怖いくせに、こいつ、俺が居ないと夜は外に出られないんだぜ」

と言った。

「おれ、大丈夫だぞ」

信次も負けずに言い返している。ゆきは急須で湯飲みに茶を注ぎ、賢の前にそっと置きながら言った。

「内観さん、本当にありがとうございます。実は今日ABC保険から連絡があって、お母さんの失踪中の保険が下りることになりました。一日1万円も頂けるんです。失踪した日に遡って、全額支払って頂けるようです。みんな、内観さんのおかげです。これでお母さんの貯金に手を付けなくて済みます。わたくしとても不安だったんです。やっと安心出来ました。本当にありがとうございました」

ゆきは何度もお礼を言った。ゆきの目頭に少し光るものが見えた。

賢が東京のアパートに戻ったのは11時10分過ぎだった。賢はゆきの家を出る時、ふたりの弟に気づかれないように、ゆきにそっと「野岸孝子が失踪したのはこの家の前からだよ」と耳打ちした。ゆきが特に驚いたような反応を示さなかったのに何となく物足りなさを感じたが、逆に幾分安心した。遠野地方に昔から語り継がれてきた神隠しや、地方神のおくないさまやおしらさまへの信仰に基づく幽界との関係が彼女の心の奥にあるのかも知れなかった。ゆきが神隠しのような出来事として母の消滅を受け取れたのが不思議だった。賢は「まだはっきりとは断言できないけど」と断って、「きみや弟たちのお母さんへの思いがお母さんの思いと深く結びついたときにお母さんは戻って来られるかもしれないよ」と伝えておいた。

「神様にお祈りします」

ゆきは頷きながら言った。

照明を点けると、ドアの郵便物の受け口から押し込まれた封書や紙片が足下に散乱していた。賢はスーツケースを入り口に置いたまま紙片を掻き集めて驚掴みにし、部屋に入って無造作にテーブルの上に置いた。紙片の中に祐子からの伝言があった。

「あなた、お帰りなさい。まず、私に電話してね。祐子」

と書いてある。部屋は昼間の熱気で蒸れていた。食べものを放置して出て来たわけではないのに果物の腐ったような臭気が漲っていた。賢は急いで窓を開け広げた。外の空気はまだ昼の熱気を含んでいて、時々吹き来る風の涼しさも火照った身体を冷やすのには十分でなかった。祐子はベルが鳴るかならないうちに応答した。

「お帰りなさい。今そっちに行くわ」

「いや、俺がそっちに行くよ、もう遅いから」

賢はスーツケースを入り口から持って来てベッドの上に載せ、中からみやげの和紙の便箋と色紙を取り出した。自分が失踪事件を調べ始めてから祐子は好きな絵を描いていない。和紙の色紙は祐子にまた絵を描いて欲しいと思って買ったのだった。賢はそれを手にしてアパートを出た。

8月に入ってから雨が無く、熱帯夜が続いている。街路は昼間に蓄め込んだ熱をまるで吐息のように辺り一面に撒き散らして、身体への日照りに拍車を駆ける。祐子のアパートに着くとすぐに祐子が扉を開いた。部屋はクーラーが効いていて、一気に汗ばんだ身体が乾いてゆくを感じた。祐子はドアに鍵を掛け賢に抱き付いた。ふたりは強く抱き合っただけを交わした。

「寂しかったわ」

「毎日電話していたじゃないか」

「でも、近くに居ないんだもの」

ふたりは部屋の中に進みソファに腰掛けた。

「ずっと絵を描いてないだろう。たまには和紙に書いてみないか？これ、おみやげ」

賢は花巻民話の郷土産店と書いてあるビニール袋を祐子に渡した。祐子は「ありがとう」と言って、また賢に抱き付いた。賢は祐子の身体の柔らかさを心地よく感じた。祐子は身体をくねらせた。……………眠気が波のように寄せては引いてゆく。引いてゆくときに太郎や信次、ゆきの姿が浮かんでくる。三度目に展開された心地よいビジョンの中で賢は眠りに落ちた。

賢が朝目覚めると祐子の姿は無かった。テーブルの上には賢のための食事が用意されている。賢は時計を見た。9時を回っていた。祐子は賢を寝かせたまま仕事に出掛けたのだった。食卓の上に祐子からのメモがあった。

「あなた、おはよう。仕事に出掛けます。愛しているわ」

と書いてある。賢は昨夜の祐子の積極的な行為を思い出した。賢はシャワーを浴びて食事を摂り、食器類を洗ってから外に出た。一夜明けてもコンクリートの街路は熱を放出し切っていないようだった。賢はアパートに帰る途中にある公園に寄って行くことにした。静かに瞑想したい時など、時々公園のベンチに腰掛けて何時間もじっとしていることがある。今もそんな意欲が沸いて来た。公園は背の高い木立に囲まれていて、周囲の喧噪から切り離され落ち着いた雰囲気醸し出している。千坪ほど

のさほど広くない場所だが、中には遊歩道と小さな池がある。賢は池の畔の木陰にあるベンチに腰掛けた。池の反対側の縁から少し離れたところにもベンチがあり、そこもこちら側よりもっと木々の枝が垂れ掛った窪地になっている。そのベンチの上に一人の中年の男性が横になって眠っている。ベンチの横にはどこかのスーパーマーケットの手押し籠が置いてあり、その籠の中に青いビニールに割（く）るんだものが押し込められている。ホームレスだと思った。最近ホームレスが居着いたようで、住民は気味悪がってこの公園に近付かなくなっていた。賢はそんなことには頓着しなかった。おかげでホームレス以外に立ち入る人も無く、静かに瞑想することができた。賢は半眼になって思考を止めた。暫くは祐子の姿、亜希子の姿、康介の部屋の中、ゆきの家、六角牛山が次々に現れては消えて行った。賢は何も考えずに流れて行く情景を観照した。やがて何も映らなくなり、周囲の景色がくっきりと眼前に展開してきた。意識が明瞭になり、目に入って来るものがすべて認識できるようになった。蝉の声が激しく耳に入る。全部で13匹の蝉がいることが分かった。いつも行くレストランの方角から五人の少年達が公園に入って来る。蝉の声の中に彼らの話し声が混じっている。

「清掃もきついな」

「真夏だからな」

「これで何人目だ」

「六人目だぜ」

「さっきのやつ殺っちゃったんじゃねえか」

「おめーが殴り過ぎたんだ」

「やべーな」

「ばーか、そんなことかんけーねー、公園を清掃してるんだぜ」

「確かここにも一人いるぜ」

賢は意識と思考を繋げた。明らかに、ホームレスに暴行を加えるつもりらしい。賢は直ぐに池の反対側に廻った。ホームレスに近づくと、背もたれの方に顔を向けて横になっている身体を揺り動かした。汗と垢の臭いが鼻を突いた。

「なんだよ一、うるせ一な」

ホームレスは不機嫌に寝返りを打った。

「起きてください。暫くここから立ち退いてください」

賢は少年達の迫り来る足音を意識しながら言った。

ホームレスの男は起きあがり賢の方に顔を向けた。陽に焼けて焦げ茶色になった顔に深い皺が刻まれている。その間に落ち込んだ目からは生気が感じられない。

「ひとが寝ているのに、うるせ一な」

と反発したが、強い憤りは現していない。その時、賢の背後から少年の一人が話し掛けてきた。

「おじさん、俺っちが片付けるからそこを退けよ」

賢は振り向いて言った。

「君たち、自分たちが何をしようとしているか分かっているのか？」

一番年長のように見える少年が言った。

「るせえな！どかねえなら、あんたも掃除するぜ！」

他の四人の少年が下品な声で笑った。少年達は手に手に角材を持っている。

「君たちは、人を苦しめる為に生きているのか？」

賢はできる限りの中低音の大声で怒鳴った。その声は少なからず少年達を驚愕させたようだった。さっきまでうろたえていたホームレスの男性も同じように恐怖心を感じたようだった。賢の声で後ずさりしていたリーダー格の少年がいきなり角材を斜め上に振り翳して、賢に殴り掛かって来た。賢はそれを避けて手刀で少年の手首を打った。少年は不甲斐なく角材を落とした。それを見ると四人の少年達は四散した。ひとりリーダー格の少年のみが残った。賢は少年の手首を掴んで逆手に捻り上げた。

「いててて・・・なんだよ一」

「君たちは、何のためにこんな事をするんだ」

「るせえな。くっせえこいつらの掃除をして何がわりい」

「よく聞け！君たちも、この人のような生き方をしたことがあるんだ。いずれまたそうなる。君たちのやった事は、また君たちに返って来るん

だ。よく覚えておけ。自分を大切にしろ！」

「わかったよ！手、離せよ！」

賢が手を離すと、少年は角材を置いたまま急いで元来た遊歩道から逃げ去った。後にホームレスが残った。ホームレスの男は少年の立ち去ったのと逆の方向に手押し籠を押してそそくさと立ち去って行った。

賢は公園を出て、いつものファミレスに入った。亜希子と仲のよかったウエイトレスが盆に水のグラスを載せて注文を取りに来た。

「いらっしゃいませ、こんにちは、亜希子さん見つかったようですね」

「ええ、もう家に戻っていると思います」

「よかったですね。お食事されますか？」

「はい、日替わりランチをお願いします」

賢はウエイトレスの持って来たメニューを開かずにそのまま返した。

「かしこまりました」

賢が食事を終えてコーヒを飲んでいると、扉を開けて亜希子が母親と一緒に入って来た。ふたりは入り口で案内係のウエイトレスと話をしていたが、程なく賢のいる席にやって来た。賢は席を立てて頭を下げた。亜希子は賢に向かって会釈をした。

「内観さん、先日は大変失礼致しました」

母親はゆっくり頭を下げた。

「こちらこそ、失礼致しました」

賢が応えた。

「先ほど、あなた様のアパートに伺ったのですが、お留守でしたので、亜希子がこちらにいらっしゃるかも知れないと申しますので伺いました。少々ご相談申し上げたいことがございまして」

「はい、どのような事でしょうか。僕にできることでしたら何でも仰ってください」

「実は、昨日家に戻りましてから亜希子から詳しい話を聞きました。今迄あまり話す機会がなかったのでございますが、主人も一緒に聞きました。昔、亜希子があなた様に助けて頂いたことがあると聞いてわたくしどもはとても驚きました。何とお礼を申し上げてよろしいか分かりませ

ん。あの時、警察の方から連絡を受けましたが、この子があなた様に助けていただいたことを一言も口にしなかったものですから、わたくしたちは誘拐未遂と思い、只胸を撫で下ろしただけだったのです。知らぬこととは謂え本当に失礼致しました」

「いえ、僕は当然のことをしたまでです」

「この子が言いますには、それからずっとあなた様を捜していたとのことです」

「はい、亜希子さんから伺いました」

「そうでしたか。この子は皆様のお友達になれたと言ってとても喜んでいます。今まで、この子はあまり友達を作らなくて、わたくしどももほっとしているところです。ただ、この子が皆様のお住まいの近くに住みたいと申しますので、どうしたものかとお相談に伺った次第です」

「そうですか。僕たちは亜希子さんがこの近くに住まわれる事を歓迎致しますが、ご両親様はそれでよろしいのでしょうか？」

「この度のお見合いの件で、わたくしたちはもう暫くこの子に社会勉強をさせようと考えようになりました。でも、家を出るのを許す代わりに三つの条件を付けました。一つ目は、今まで通り習い事は続けること。二つ目は、毎日最低1回は家に連絡を入れること。3番目は結婚したい相手が見つかった場合、自分で決めずに必ず両親に相談すること。この三つです。簡単なことだと思われませんか？ですのにこの子は、三番目は約束できないなんて申しますの。それで、わたくしどもは誰か心に決めた人がいるのかと問い糺したのです」

ここまで話すと、亜希子が

「お母様、もうやめてください」

と話を遮った。母親は穏やかに

「あなたはすこし黙っていなさい。内観さん、この子はあなた以外の人とは結婚しないって申しますの。主人もわたくしも啞然としました。急なことなのでどう判断してよろしいのか分からなくなってしまいました」

賢はじっと聞いていたが、僅かな沈黙の後で言った。

「亜希子さんはまだ大学を卒業されてから時間が経っていません。今までは僕に対するイメージを理想像として作り上げておられたのだと思います。現在の僕は亜希子さんのお抱きになっておられる理想的な男性像に合致しているとは到底思えません。もっと時間を掛ける必要があると思います。何年かして、それでも僕が結婚の相手に相応しいと判断されるのでしたら、その時にご両親に相談されたらよろしいと思います。今結論を出すのは早計だと思います。只、自分の事を申し上げて申し訳ありませんが、現在の僕は誰とも結婚する意思がありません。何年かしてそれも変わるかも知れませんが、今は確定的な事は申し上げられません」

母親はそれを聞いて尋ねた。

「内観さん、あなた様は亜希子の事をどう思っているのですか？」

「僕は亜希子さんが好きです。亜希子さんの心は、僕の知っている誰よりも純粹だと思います」

賢は穏やかな声で応えた。亜希子はふたりの会話をじっと聞いていたが、賢のこの言葉で目頭にうっすらと涙を浮かべた。ウエイトレスがコーヒーを二つ運んで来た。母親が再び口を開いた。

「内観さん、今日の夕方お時間がおありでしょうか？」

「はい、特にこれといった予定はございませんが」

「主人が一度あなた様とお食事をご一緒させて頂きたいと申しまして」

「はい」

「性急なことで恐縮ですが、それでは6時に赤坂の割烹笹亭にいらしていただけますか？」

「はい、承りました」

亜希子は賢の方を見て、

「わたくしの為に申し訳ありません」

と言った。

「いいえ亜希子さん、僕は今ここに貴女と同じ場に生きているのですから当然のことです」

賢の言葉に母親はほんの一瞬怪訝そうな様子を見せたが、何も言わなかった。

笹亭は赤坂見附の駅から永田町方面に向かって歩き、坂を少し下ったところにあった。賢は歩を遅く運び、6時4、5分前に笹亭の入り口を潜った。久し振りに着る背広の窮屈さと暑気のため、背中に汗が流れるのを感じた。通されたのは奥座敷の八畳ほどの部屋で、廊下に面したガラス障子を通してライトアップされた内庭が望める。部屋の中央の座卓に懐石膳の用意がされていて亜希子の父親が既に席に着いていた。60歳前後の風格のある男性だった。賢は部屋の入り口で頭を下げた。

「よく来てくれました。さあ、そちらにお座りください」

亜希子の父親は慇懃に賢に着席を促した。賢は「失礼致します」と言っ
て、父親と向かい合って座った。このような高級料亭は初めての経験だったが、賢は不思議と落ち着いていた。

「初めてお目に掛かります。内観賢と申します」

「亜希子の父親の藤代肇です。亜希子がいつもお世話になっております。今日はご無理を申し上げて」

「いいえ、遠慮もせず伺わせていただき恐縮に存じます」

「まあ、堅苦しい挨拶はこれくらいにして気楽にしてください」

「はい、ありがとうございます」

賢は正座を崩さなかった。料亭の女将が挨拶に来た。

「藤代さま、いつもご贔屓(ひいき)いただき、ありがとうございます。今日の主菜はアワビと毛ガニの甘酢和えでございます。お飲み物はどのように致しましょうか？」

「とりあえずビールをもらおうか。内観さんは？」

「はい、ビールをいただきます」

「かしこまりました。お連れ様共々ごゆっくりとお過ごしくださいませ」
女将は挨拶をして下がった。すぐに仲居がビールを運んで来た。仲居は先ず賢に、続いて藤代のグラスにビールを注いだ。別の仲居がお通しを持って来た。

「どうぞ、遠慮無く」

そう言うと、藤代はグラスを持ち上げ半分ほど飲んだ。

「ありがとうございます」

賢もビールに軽く口を付けた。料理は時間を計ったように、前の料理を食べ終わるとほとんど同時に運ばれて来た。主菜が運ばれて来たところで藤代が訪ねた。

「ところで、あなたは亜希子とどういう関係ですか？」